

---

# 真剣で私と踊りなさい！～光陰の二人～

tack

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真剣で私と踊りなさい！～光陰の二人～

### 【NZコード】

N6645V

### 【作者名】

tack

### 【あらすじ】

真剣で私に恋しなさい！の一次創作。 オリジナル設定。 主人公最強設定。 原作ブレイカーなのであしからず。

武神・川神百代と双璧をなすと言われる伊達隼人  
工業地帯に居を構える柳瀬悠獅  
この一人を歯車に動き出す物語

## いつもの朝

川神市。関東の南にある政令指定都市で人口全国第9位。市の北側に多馬川が流れ東京都との境になつており、東部には東京湾が広がつてゐる。

江戸時代から栄えていた歴史ある街で、武家も多く、馬も多かつた事から川に多馬川と名前がついた。

歴史ある街、武家が多いと聞いて良く勘違いされるが、東京との近さからここ数十年で駅前付近を中心に一気に近代化し、若者の街とまで言われるようになつた。

駅前は人が多く、駅から離れた多馬川沿いの低地はのどかな田園風景が広がり、東京湾岸に広がる埋立地は大規模な重工業地帯となつてゐる。

その川神市にある武道の総本山・川神院。

そこでは、世界各地から集まつた修行僧たちが己を高めるために、朝から稽古に励んでいた。

その一角、他の修行僧と比べ明らかに若い二人の男女がいた。

長い黒髪を舞わせ拳を放つ女・川神百代

銀髪をなびかせ同じように拳を放つ男・伊達隼人

川神の矛と盾と呼ばれる一人である。

「百代」

「全く、朝から『苦勞』だと思わんか。」

「隼人」

「・・・」

「百代」

「なんで、こんな朝から苦行を私が・・・」

「隼人」

「・・・・・」

「百代」

「しかも、こんな美少女を拳骨で叩き起こすなど・・・」

「隼人」

「・・・・・・・・」

文句を言いながらの百代と口を開かない隼人。  
その異名と同じく正反対な一人だ。

「百代」

「おい、聞いてるのか?」

「隼人」

「聞いてる」

「百代」

「じゃあ、なんで何も言わない」

「隼人」

「ここで何を言つても何も変わらないだろ」

「百代」

「だからと言つて、『終わった』へつ？」

「隼人」

「ノルマ終了。先いくぞ」

「百代」

「あつ！ 待たないかつ」

ノルマをこなした俺は、まだ終わっていない百代を置いて早々に立ち去る。

「少女」

「あつ、お兄様！ 『飯は食べた？』

この俺のこと、お兄様と呼んでくるのは、川神一子。  
百代の妹だ。お兄様と呼ぶが俺の妹ではない。

「隼人」

「おはよう一子。俺は食べたよ」

「一子」

「やつ。じゃあ、お姉さまは？」

「隼人」

「知らん」

百代は俺よりも後に鍛錬に来たので食べたかは知らない。

「隼人」

「それより、また一子はトレーニングか？」

朝の鍛錬を終えているにもかかわらず未だ体操着の一子は、

「一子」

「うん。また、ちょっと走ってくるわ」

「隼人」

「えらいな、一子は」

「一子」

「まだまだ、強くならなくちゃ。それじゃあ、行つてきま～す。」

そういうと一子は走つて行つた。

その一子を見送つてから、俺は学校へと向かつた。

そして、所変わつて、橋（通称変態の橋）の上。

「男」

「伊達隼人殿とお見受けする。川神鉄心殿に勝負して頂こうと思つたが、川神百代、又は伊達隼人のどちらかに勝たなければ駄目だと言われた。

なので、手合させ願おう。」

俺は、どつかの武芸者に絡まれていた。

「隼人」

「アンタ、よく俺だつてわかつたな。」

俺の名前って、そんなに知られてる訳じゃないぞ。  
異名はそれなりらしいが。

「男」

「それは、鉄心殿に伊達殿の事を知らないと申した所、写真を賜つ  
た。」

糞ジジイめ、余計なことを。

「隼人」

「じゃあ、悪いけど。後から来る百代の方に挑んでくれ。」

「男」

「なつ！ それはどうこうつけ！」

「隼人」

「どうもいひもない。そつちに挑め。俺はめんぢい」

そつこひと武芸者の顔がみるみる赤くなつていぐ。

「男」

「貴様！ 私を侮辱しているのか！ ふざけるな！」

いや、別にいつもこうなんですねけど。

武芸者は、今にも飛び掛つてきそうな感じだ。  
さて、どうするか。

「少年」

「ははは。ちょっと、すいません。落ち着いてくださいよ。」

そんな事を考えていると、横から、一人の男。

「少年」

「兄さん。もうちょっと、真面目に相手してあげなよ。」

そこに来たのは、百代の舍弟・直江大和。頭が回り、仲間内からは軍師と呼ばれている。

「百代」

「やつだぞ。弟の言つ通りだ。たまには、お前が相手するといい。」

大和の後ろには、百代を含めた通称・風間ファミリーと呼ばれる、学園では、有名なグループがいた。

「隼人」

「とか言いつつも、俺が相手するとお前ひるたこだろ」

「百代」

「まあいい、私がいい」ひ。

そう言つて、百代は武芸者に向かつていった。

五分後。

「百代」

「物足りない。」

武芸者？ 瞬殺。 殺してないけど。

「隼人」

「そうか。」

「百代」

「ああ～。物足りない。」

そこで、こっちを見るな。  
そう思つていると、いきなり

「百代」

「川神流 無双正拳突き」

奥義使つてきました。

「隼人」

「ばかっ！ 川神流防御術 袖流し」

奥義使われたらこっちも使うしかない。  
しばらく攻防が続くが終わらない。

「隼人」

「いつまで、続けるんだ？」

「百代」

「お前に当てるまで」

「いいつは俺を殺す気か！」

「隼人」

「川神流捕縛術 蜘蛛の巣 派生 蜘蛛糸絡め」

とりあえず、動きを封じる。

「百代」

「全く、いつも思つだが、お前は人を縛るのが好きだな。」

「隼人」

「縛つてはいない。絡め捕つてるんだ。」

動けない百代を放置して、ファミリーの所に行く。

「隼人」

「よう」

「大和」

「おつかれ、兄さん。」

俺を労う大和。

「男1」

「モモ先輩を動けなくするとか凄すぎだろ。」

この男は、島津岳斗。筋肉むきむきの暑苦しい男。パワー担当だ。

「男2」

「ほんと、最強を封じるとかどんなチートだよってね」

「」については、師岡卓也。色白のもやしつ子。機械系に強い。通称モロ

「女1」

「そして、モモ先輩は、蜘蛛に食べられる蝶のよつに隼人に食べられるのでした。」

「」この人聞きの悪いのは、榎原小雪。色白で電波つ子。通称ユキ

「女2」

「はつ！ それだ。隼人先輩。いえ、師匠。私にその技を！ そして、それを使って、大和を！」

「」これは、椎名京。無口な読書家。というよりファミリー以外眼中に無い子。大和LOVE

「大和」

「兄さん。それ無しね！ マジで！」

「」これに、一子ともう一人を加えて、風間ファミリー。

「岳斗」

「でも、実際、それが使えたなら何でもやり放題じゃねえか。」

「隼人」

「まあな。」

「」岳斗の言葉はその通り。後の事を考えなればだが。

「岳斗」

「岳斗」

「じゃあ、今のモモ先輩にはなんでもし放題ー。」

「隼人」

「まあ、こんな感じだな。」

そう言つて、俺は百代のあいをなごてやる。

「百代」

「や、やめろ。ち、力が・・・

「コキ」

「あつ、僕も僕も。」

百代は抵抗するも蜘蛛の糸のせいで動けない。コキもそれに便乗する。

「岳斗」

「じゃあ、俺様も」

「モロ」

「あつ、岳斗ー。」

モロの静止を聞かづに岳斗が百代に触ろうとする。しかも、胸に。そして、触れる瞬間に蜘蛛の糸を解く。

「あれつ？」

「岳斗」

「岳斗」

岳斗の手は、空を切つた。

「隼人」

「じゃあな、岳斗。」

そう言つた瞬間に、岳斗は飛んだ

## こつもの朝（後書き）

### 技紹介

川神流防御術 袖流し

相手の攻撃をいなして、受け流す技。物理攻撃限定。

川神流捕縛術 蜘蛛の巣

足から氣を流して、それを蜘蛛の巣ようにはり、相手を絡めとる。

川神流捕縛術 蜘蛛糸絡め

蜘蛛の巣で絡めとった相手を更に氣で作った糸で身動きとれないようにする。

## 川神学園

私立川神学園。

川神院総代・川神鉄心が経営する学園である。

ここには、変わり者から名家、果てには財閥の御曹司までが通う学校である。

〈女子生徒1〉

「あつ、伊達先輩よつ！」

〈女子生徒2〉

「モモ先輩も一緒よつ！」

校門付近に近づけば近づくほど、聞こえてくる黄色い声。

〈モロ〉

「相変わらずの人気だよね。」

〈岳斗〉

「全くだな。この俺様には、誰も来ないのに。」

〈京〉

「まあ、岳斗がモテないのは今に始まった事じゃないけどね。」

〈岳斗〉

「なんだと！ お前だつてフラレまくつだろ、京！」

「京」

「私は岳斗と違つて一途だから。ねつ、大和。」

「大和」

「そういうて、じつちを見るな。」

いつも会話が繰り広げられる。

百代？ 校門入ろうとした時に、女子生徒抱き上げてどつか行つた。

「男」

「相変わらずだなあ、お前たちは」

ファミリー以外の人間から声をかけられる。

「大和」

「あつ、川口先生。おはよつゞえいします。」

「モロ・岳斗」

「おはようござこます。」

大和の挨拶に続いて、モロと岳斗が挨拶する。

「川口先生」

「おう！ おいつ、椎名と榎原はともかく、伊達。一応、担任なんだから挨拶ぐらいしや。」

「隼人」

「どうも。」

「岳斗」

「やーい、詫われてやんの。」

〈隼人〉

「ほお～。 いい度胸だな、岳斗。」

〈岳斗〉

「あ、いや、その」

〈コキ〉

「あはは～、岳斗、弱～。ケタケタケタ」

少し凄んだだけでビビる岳斗とそれを笑うコキであった。

〈川口先生〉

「にしても、風間はともかく、川神姉妹はどうした?」

〈大和〉

「姉さんはいつもの、ワン子は・・・」

〈一子〉

「みんな～、おはよう～」

〈大和〉

「この通りです。」

〈川口先生〉

「なるほど」

一子が合流する。

「隼人」

「それじゃ、先生。また後で」

「隼人」

「なんだ、妬いたか？」

「百代」

「お前が、一人で先行つただけだろ。」

「隼人」

教室に入った瞬間、百代が目の前に現れる。

「百代」  
「遅かつたな。」

大抵のメンバーは、2年F組にいるが、俺と百代は学年が違うため一緒にではない。

それでも、百代と俺が一緒にのには、何か感じさせられるが・・・

学年の違うメンバーと昇降口で別れる。

「隼人」  
「んじや、俺行くな」

「アホ」

百代の話を流しながら、席に向かう。  
ちなみに、俺は、窓際、後から一番田といつ最高の位置に陣取っている。

まあ、俺の後に百代がいる事を除けばの話だが。

「百代」

「おい、こんな美少女に対してアホはないだろ。なつ、弓子」

文句を言いながら、隣の矢場弓子に振る百代。

「弓子」

「えっ、急になに？ あつ、『ほん。 急になんで候。』

あつ、素が出た。

「百代」

「いや、隼人が私をアホと言つんだ。どひつひつ？」

「弓子」

「それは・・・、ねえ？」

百代の問いに苦笑いを浮かべる弓子。

本人の前じゃ答えにくいだろ？ が、素が出てるぞ。

「隼人」

「アホじゃない奴は、そんな毎月毎月借金しないだと」

「百代」

「なつ」

「川口」

「まあ、確かにその通りで候。」

百代は言ひ返せず、弓子は借金を取り立てに入つた。

これでしばらくなは静かだ。

「川口先生」

「おひ、お前ら、席に着きやがれ。」

我らが担任・川口恭平の登場で話は打ち切られたが。

「川口先生」

「出席となるわあ～」

「川口先生」

「川神・・・伊達・・・矢場・・・」

一人一人、名前を読み上げる。

「川口先生」

「あ～、富崎はまだ帰つてきてないのか

「男子」

「先生。富崎君、生きてるんですか～」

「女子」

「三週間音沙汰なしですよ～」

特に注目することもなくホームルームが終わる。

## 川神学園（後書き）

キャラ紹介

川口恭平

隼人と百代のクラス3-Fの担任。

イケメンで、兄貴肌のため生徒の面倒見がいい。

学園の男性教師人気No.1

昔、相当ヤンチャだったらしく、彼の残した伝説が多くあるらしい。

あれからしばらくして昼休み。

「百代」

「隼人。 昼はどうするんだ?」

「隼人」

「・・・」

昼休みに突入した途端、百代が声をかけてくるが、聞き流す俺。

こういう時は、絶対にかかる。  
それを悟った弓子は、早々とどこかに行つた。

「百代」

「おい、返事をしろ。隼人。」

「隼人」

「・・・・・」

無視無視

「百代」

「いい加減にしないと、私とお前の関係を言いふらすぞ。」

変なことを言い出した。

「隼人」

「ちなみに聞くが、俺とお前の関係とはどういうものだ?」

「百代」

「えつ、それはもちろん。私とお前が一つ屋根の下で・・・」

「隼人」

「それを言つたら、一子や爺もだな」

「百代」

「それはそうだが、お前のファンが聞いたらどうなるかな?」

「隼人」

「知つたことか」

冷たく言い放つと、

「百代」

「あ〜、もういいだろ。頼むから。弁当を分けてくれ〜。」

なんて言つてきた。

ちなみに、別に俺は弁当を一つ持つてたり、備蓄している訳じゃない。

つまり、

「隼人」

「俺の弁当を奪いに来たか。」

「百代」

「いいだろ。育ち盛りの美少女がお腹空かしているんだ。」

「隼人」

「これ以上、どこを成長させるつもりだ。」

「百代」

「もちろん、胸を」

「隼人」

「いや、そこでセニを言つたなよ。周りの田を『氣にしろ。』

「こいつ、これ以上でかくしてどうする気だ。」

「隼人」

「それに、俺から貰わなくともファンから貰えるだろ、お前。」

「百代」

「それは、お前もじゃないか、隼人。むしろ、私はいつも受け取つてもらえない女子達にチャンスを与えているんじゃないか!」

確かに受け取つた事はない。いや、一度あつたが。

その時、いきなり百代が不機嫌になつたのを覚えている。

「隼人」

「そつは言つても『はいエブリバディー。今日も始まりました、LOVEかわかみ、パーソナルティは二年S組のハゲこと井上準と・・・』でもう一人のパーソナルティがいるんだが・・・モモ先輩、早く来てくださいよ!』だとよ。」

「百代」

「うう」

百代は、舌打ちして出て行つた。

「百代」

『遅れた。人生、喧嘩上等、諸行無常。三年の川神百代だ。』

「準」

『さつそくですが、お便りです。モモ先輩に質問です。好きな娘が出来ました。どうすればいいでしょう?』

「百代」

『私が味見してやる。連れてくるといい。』

『ちなみに、本氣で言つてますからね。』

まあ、百代だからな。いつもの事だけどな。

「準」

『モモ先輩にお便りです。モモ先輩、好きです。付き合つてください。』

「百代」

『私と付き合つたかつたら、三年の伊達隼人を倒すことだ。』

はあ? あいつ、何言つてやがる。

「百代」

『あつ、ちなみ、隼人ファンの諸君。今日の昼は、隼人の弁当は私が食べる。ラジオが終わつて、最初に来た奴には隼人に弁当を食べさせる権利をやる。』

「隼人」

「ぱつ、何言つてやがる。」

「百代」

『じや、曲流すぞ』

「準」

『ちよつ、モモ先輩。勝手に『つるわ』。バキッ!』・・・・・

あ〜、逃げよ。

所変わつて、二年F組

「大和」

「たいへんだな。兄さん。」

「隼人」

「だつたら、あいつを何とかしやがれ。」

逃げ込む先は、ここが屋上ぐらいしかない。

「大和」

「うちのクラスの女子も、狙ってるからね。」

<隼人>

「まい。

川神流隠遁術

空蝉」

奥義使って隠れました。

## 学園生活（後書き）

### 技紹介

川神流隱遁術 空蟬

自分の気配や姿を相手に捕らえられないようになる。  
効果時間は相手によって変わる。

## 放課後

あれからしばらくして放課後。

2・Fに逃げ込んで、百代から逃げて、弁当を死守。それで終わると思ったら、机の上に弁当が山積み。百代と弓子、時々、一子を呼んで全部食べた。正直、今日は何も食べたくない。

＼弓子／

「（弓子）苦労で候。お茶でも飲むがいいで候。」

弓子がお茶を差し出す。

少しだけ安らぐ。

＼百代／

「おつ、なんだ（弓子）。隼人を落としにでもかかったか？」

＼弓子／

「えつ！ 何のこと？」

百代に言われて、動搖する弓子。この子、ちよくちよく素が出るな。

＼百代／

「いやいや。一人でお茶を飲んで、いい雰囲気だったからな。」

＼弓子／

「いい加減な事を言わないでほしい候。」

「百代」

「私としては、なんでもいいがな。」

「この一人つて、結構仲良いよな。」

「男子」

「おい、外で今から決闘だつてよ。」

「えーと、確かアイツは・・・・・なんだつけ？」

「まい。クラスの男子の言葉に反応して、皆が決闘を見に行く。」

「百代」

「おい、隼人。行くぞ。」

俺は、百代に首根っこ掴んで連行された。

そして校庭。

「一子」

「あつ、お姉さま。お兄様。」

「百代」

「おー。ワニ子。かわいい妹よ。」

「隼人」

「よう」

ワン子含めた風間ファミリーがいた。

「男」

「よう。モモ先輩、隼人先輩。」

そこには、朝にはいなかつたファミリーのリーダーの姿もあつた。

「隼人」

「ようキャップ。いつから来てたんだ？」

「男」

「ついさつきだぜ！ なんか面白そうな事が起きそうな予感がしたから来てみたぜ。」

「イツはキャップこと風間翔一。大和、一子と一緒に風間ファミリーを立ち上げた人物だ。

そして、コイツの感が当たる当たる。とてつもない強運の持ち主。

「百代」

「ところで、決闘する奴は誰なんだ？」

「大和」

「岳斗だよ。姉さん。」

「隼人」

「ほお、岳斗か。誰が相手なんだ。」

「モロ」

「なんか、2・5の仲村つていつ人みたいだよ。」

「隼人」

「なんだ。じゃあ、ファミリー集合か。」

「ユキ」

「やうだよ。とこう訳で、とこうやつー。」

ユキは返答しながら、俺の肩に乗ってきた。  
いわゆる肩車といつヤツだ。

「一子」

「あ～、ずるい！ お兄様、私も私も。」

「京」

「あ～、ワン子」

一子も京の制止を聞かずに肩に乗りついでいる。

「岳斗」

「お前、いい加減、俺様の活躍に集中しろー。」

そろそろ爺が口を挟んできただし、岳斗の言葉を囁囁に静かにした。

「爺」

「それでは、これより決闘の儀を始める。」

爺の言葉で、周囲から歓声があがる。

卷八

一 西方 2 - F 島津岳斗

卷之六

卷之六

35

「東方  
2-S  
仲村透」

四  
十

「はい！」

「ルールは、素手のみ。どちらが戦闘不能、負けを認めたらそこで終了じや。」

卷之六

岳斗が開始と同時に力任せのラリアット。

「うわ～」  
仲村

仲村はそれを避ける。そして、

仲村 <  
>

「せい」

蹴りを繰り出す。

その蹴りは、サッカーボルトに所属している為、かなりのキレだ。

卷之三

中口體、引體、仰臥起坐、俯臥撐、

1

「シテ、御井戸様」

卷之三

卷之六

「それじゃあ、いつまで耐えられるか勝負だ！」  
「一つ！」

岳が渾身のグラビアツト。

「 う さめ 」  
仲村 伸へ

それを食らつた仲村は、

∨ 半印 ∨

「一発で終わりかよ。」

爺爺

「勝者 2・F 島津岳斗」

「岳斗」

「フン」

勝利者宣言を受けて、自慢の筋肉を見せ付けるよつこ、ポーズをとる岳斗。

「隼人」

「帰るか。」

「百代」

「そうだな。」

「京」

「賛成。」

「ユキ」

「賛成賛成」

「隼人」

「ユキはいつまで乗つてるつもりだー。」

「ユキ」

「あはははははー」

「隼人」

「クッキー。コーヒー。」

「百代」

「私は、コーラだ。」

俺と百代は、溜まり場である秘密基地にいた。

秘密基地と言つても子供が作るようなモノではない。  
廃ビルの最上階を許可を取つて使つてているのだ。

クッキーとは、九鬼製のご奉仕ロボである。なぜそんなものがある  
かは単純。

貰つたそれだけだ。

「クッキー」

「はいはい。ちょっと待つてね。」

ちなみにかなり高性能で喋るだけでなく変形もある。

「百代」

「それにも、暇だな。隼人、ここは一戦私とどうだ?」

「隼人」

「断る」

「イツ、さつきの決闘見てバトルマニアの血が騒ぎ出しあがつたな。

「百代」

「じゃあ、せい」

ソファーでくつろいでいる俺を押し倒して馬乗りになりやがった。

「百代」

「マウントをとれば、いくらお前とはこえ一方的だろ。」

まあ、単純なパワーでは、コイツの方が上だしな。

「京」

「モモ先輩たち、いる~？」

京が来た。ナイス、京！

「京」

「ねえ、モモ先輩。五時間ぐらいでいいかな。」

いきなりなに言つてやがる。

「百代」

「確かに、それなら数回はできるだろしね。」

お前もなに言つてやがる。

「京」

「隼人先輩。」

「隼人」

「なんだ？」

「京」

「チヒリー卒業おめ。」

「おおおの札を手になんて！」と叫こやがる。

「京」

「それじゃあ、」

京が帰らうとするが、

「京」

「あれ、動けない。」

「百代」

「私もだ。」

「隼人」

「蜘蛛の巣」俺が何もせずにおとなしくしてると思つたか？」

「百代・京」

「「ヒヅ」」

「隼人」

「じゃあ、お仕置きだ。」

「百代・京」

「「まつ」」

「隼人」

「川神流幻惑術　朧月」

大和

「ねえ、兄さん。この状況は？」

〈隼人〉

「お仕置き中だ。」

百代

京 <

## 放課後（後書き）

### 技紹介

川神流幻惑術 脣月

相手にとつて最悪の幻覚を見せ付ける。

## 川神の闇

- s.i.d.e      ? ? ? -

親不孝通り。

川神市の中でも、治安の悪い地域として知られる場所だ。  
今は夜。つまり、

「男」

「おい、ふざけんなよ。糞野郎。」

「こうこうバカもいつぱいいるつて事だ。」

「男」

「わっ起きから何笑つてんだよー。テメエー!」

「ああ、つるさい。」

「こうこう奴は、わざわざと寝かしつけてやるのが一番なんだけど。」

「男」

「てこうかよ。お前、よく見たら、板垣家の味噌つかすじやねえか」

「あつ、コイツ。俺の事知つてんだ。」

「男」

「お前の兄弟に普段世話になつてつからな。お返しじねえとな」

指を鳴らしながら、近づいてくる男。

ああ、やる気満々なのね。

「男」

「んじや、とりあえず、死んでくれ。」

殴りかかってくる。

まあ、素直に食らってやる気はない。

「男」

「おっ、避けたか。いいねえ。いつまで、避けられるかな?」

調子に乗ってるか。  
まあいいけど。

「男」

「それにしても、気持ちワリイ顔で笑ってんじやねえよー。」

ひどいなあ。この顔が一番楽なのに。

「男」

「おつと、そつちは、行き止まりだぜー。」

避けてる間に、人のいない脇道に入ってしまった。  
その上、行き止まり。

「? ? ? ?」

「ここまでか。」

俺は、初めて口を開いた。

「ねえ、君の姉かね？」と、腰を下ろして、腰元が尋ねた。

終わるばかりか、おじいさん。

## こんなチンケな事。

- side out -

- s i d e  
? ? ?

Y (女) 2011.5

全くあの子に何せてんだか

私は、一人の子を探して歩いていた。

男 <  
>

「ねえねえ。お姉さん。俺と遊ばない?」

「黙れ、豚。」

こんな奴に絡まれるのも、あの子の性だ。

男

あああああああああ

そんな事を考えていると、突然、悲鳴が聞こえた。

＜？？？（女）＞

「あつちか」

悲鳴のした方へ向かつていく。

そこには、一人の男が四肢を碎かれ、泡を吹き、血を流しながら倒れていた。

＜？？？（女）＞

「全ぐ。」

この辺にいると思つのだが、あの子は隠れるのがとてもうまい。

＜男＞

「亜巳姉さん。どうしたの？」

しかし、考えとは裏腹に目的の人物はすぐに現れた。

＜亜巳＞

「お前を探しにきた」

目的の人物は、いつも通りの柔軟な笑みを浮かべていた。

＜男＞

「なんかあつたつけ？」

そして、首を傾げている。

「お前、

「お前の稼ぎの方がどんなモンか聞きに来ただけだよ

」

「男、

「俺の方は、今のヤツがもう少しすれば出来上がるから。  
しばらくすれば、まとまった金が入るよ。」

「お前、

「お前も相変わらずだね。」

「お前、

「お前も相変わらずだね。」

「男、

「じゃあ、俺行くね。」

「これから、また仕込みだから。」

「お前、

「ああ、がんばりな。悠獅。」

ひつじて、私、板垣亜巳は柳瀬悠獅と別れた。

## 新メンバー1

「という訳で、クリスを仲間にしようと思つ。」

金曜集会でキャップがいきなり言い出した。

キャップが言うと、2・Fの転校生であるクリスティアーネ・フリードリヒを風間ファミリーの加えよつと言つのだ。

そして、ファミリー内の意見は、

「キャップ」

「え」と、賛成4 反対2 無効票2 か。」

ちなみに、賛成は、キャップ、大和、一子、百代、岳斗。

反対は、京、モロ。無効票、俺、ユキ。

「隼人」

「ちなみに、賛成陣の意見は。」

「キャップ」

「面白くなりそうだ。」

「大和」

「別に害はないだろうじ。居て楽しかつたらいいんじやないか?」

「一子」

「戦える相手が増えるわ。」

「百代」

「可愛い子は、全部、私のだ。」

「岳斗」

「美人だし」

キヤップ、一子、百代、岳斗の順だ。

一子はともかく、百代は相変わらずだ。

「キヤップ」

「じゃあ、反対派は・・・・・言わんでも分かるか

「京」

「皆がいればそれでいいよ。他のなんていらない。」

「モロ」

「うん。これ以上はもう誰もいらないよ。」

京、モロの順だが、言つてゐる事は一緒だな。

「京」

「それよりも、大和！　害はあるんだな。」

京が大和を指差し言つ。

「隼人」

「ちなみに、害とはなんだ？」

「京」

「大和に近づく雌が増える。」

「隼人」

「害があるのは、大和じゃなく京か。」

さすがは京。大和一筋だな。

「百代」

「この今まで思われて、幸せものだな。弟よ。」

「隼人」

「そこには、同意しよう。」

百代の言葉に同意する俺。

「岳斗」

「おいおい。それを言うなら、モモ先輩と隼人先輩も十分幸せだろ。」

「

「モロ」

「そうだね。あれだけ、モテてるんだから十分だね。」

「大和」

「というか、姉さんは男に興味がないの?」

岳斗にモロが同意して、大和が問う。

「隼人」

「別にそういう訳ではないが、私をトキメかせる男がないんだ。」

「ユキ」

「じゃあ、誰がモモ先輩をトキメかせられるか、勝負だね。」

ユキの提案に対し、

「モモ」

「僕には無理。」

「岳斗」

「俺様、連敗中だから。」

「キヤップ」

「恋に生きるのは、なんか違つぜ。」

「大和」

「勝算無し。パス。」

お前ら、これじゃあ、引けないだろ。

「ユキ」

「どうするの〜。隼人〜。」

燐るなユキ。そして、期待に満ちた目で見るな京。

「隼人」

「ちっ、仕方ねえ。百代、ちょっと壁に寄りかかれ。」

「百代」

「ふむ。どうか?」

言われたとおり、壁に寄りかかる百代。

そこに手を顔の横に叩きつけ、百代が驚いていとこひに  
覆いかぶさり、顎を軽く持ち上げ、視線を合わせて、見つめてから

「隼人」

「今から、お前が誰のものかハッキリさせてやる。いいな？」

それをやいて、唇を近づけ、

「隼人」

「はい。終わり。」

ギリギリで放す。

「百代」

「えつ、うつ あ。」

百代は顔真っ赤。

何真つ赤になつてんだコイツ。

そんな事を考えていると、後ろから服の裾を掴まれた。

「隼人」

「ん？ な？」

振り返ると、睨む一子、ダークイロユキの一人。

どうすりやいいんだよ？

＜キャップ＞

「という訳で、仲間にならないか？」

キャップがクリスを誘う。

あれから、酷い目にあつた。

一子、ユキの機嫌を直し、真っ赤になつてショートした百代を復活させ、

他のファミリーに散々イジられ、

ようやく解散した。

したが、なんか百代に変なスイッチが入つちまって、ぎこちないぎこちない。

ようやく、クリスの勧誘までこぎつけた。

＜大和＞

「普段はこうやって、遊んでるんだ。どうだ、仲間にならないか？」

クリスの勧誘は、キャップがメインで、大和がサポート。

残りは野球中。

卷之六

「ファン。来いよ、京。俺様がバックスクリーンに叩き込んでやる。」

京  
<  
>

「おへ行」あじまー

ピッチャーは京、バッターは岳斗。それ以外は、適当なところについている。

京 <

## 一イケメンは打てないボーリング

「なに？」  
△印へ

空振り。

大和

「京真面目にいっておれぬ」

京 <  
>

「うむ」

大和の言葉でようやく眞面目になつた。

力キン！！

京

一  
あつ  
「

「岳斗」

「ほらみる。これなら、文句なしでバックスクリーン直撃でホームランだろー！」

岳斗の打つた球は勢い良く飛んでいった。

「百代」

「甘いなー、岳斗。」

百代の叫うつとおつ。甘い。

「一子」

「やあああああああ」

「ユキ」

「せええええええ」

ユキと一子が疾走する。

そして、

「一子」

「ユキー！」

「ユキ」

「了解だよー！」

足の速い一子が足場になり、跳躍力の高いユキがジャンプ一番。

「ユキ」

「キャラーッチ！」

〈隼人〉

「はい。岳斗アウト。」

〈岳斗〉

「くそつ。あのコンビはずるいだろ。」

まあ、確かにあのコンビはファミリーでも最強クラスの組み合せだ。

〈キャップ〉

「と、こんな感じなんだ。」

〈クリス〉

「おもしろいそうだな。私も入っていいのか?」

〈キャップ〉

「ああ。」

どうやら、クリスの加入も決まったようだ。

## 新メンバー2

「女」

「お願いします。なんでもしますからー。仲間に入れてください。」

なぜ、俺たちは、初対面の後輩に頭を下げられてるんだ?

「キヤップ」

「えーと、黛さんだっけ? とりあえず、顔を上げてくれ。」

確かに、クリスの歓迎会を島津寮でやっていたんだが、仲間外れにしちゃ悪いから、同じ寮に入つた後輩を混ぜたんだよな。それで、飯食つたらこうなつたと。

「キヤップ」

「黛さん。悪いんだが、そんなんじゃ仲間には入れられないな。」

キヤップが言った。

黛さんは、相当ショックのようだが、キヤップが続ける。

「キヤップ」

「そんな風にしないでも、楽しそうだから混せてでいいんだぜ。」

「モロ」

「キヤップ。」

キヤップの言葉にモロが感動してる。

「黛」

「それでは」

黛さんが深呼吸して、

「黛」

「楽しそうだから、混ぜてください。」

言つた。

「キャップ」

「うさ。駄目。」

「モロ・岳斗・大和」

「おおおおおおおおおおおおおお」

キャップの言葉に、盛大にモロと岳斗、大和が叫ぶ。あつ、黛さん、気絶した。

「モロ」

「アンタは鬼かつ！」

「キャップ」

「冗談だよ。冗談。」

あつ、黛さん、復活した。

「キャップ」

「いいや。じゃあ、まゆつねもいれから仲間だな。」

「黛」

「ほ、まゆつち？」

「キヤップ」

「あれ？ あだ名だけど、嫌だった？」

「黛」

「いえいえいえ。ありがとうございます。」

これで新メンバーが一人か。

「一子」

「それじゃあ、自己紹介をしどうか。」

「百代」

「川神百代。武器は拳一つ。好きな言葉は誠。」

「一子」

「川神一子！ 武器は薙刀！ 魔気の勇の字が好き。」

「京」

「椎名京。弓使い。好きな言葉は「・・・女は愛。」

「ユキ」

「榎原小雪。格闘が得意だよ。好きな言葉は「樂かなあ」

「クリス」

「クリスティアーネ・フリードリヒ。武器はレイピア。儀を重んずる。」

「黛」

「黛由紀江です。刀を使います。礼を尊びます。」

女子が終わり、

百代が指差し、

「百代」

「あのバンダナがキヤップ。リーだーだ。」

「百代」

「筋肉が岳斗。バカだが面倒見はいい。」

「百代」

「根暗そなのがモロロ。優しくはある。」

「百代」

「その隣が、大和。私と隼人の舍弟だ。頭が回る。」

「百代」

「で、そこで、ユキとワン子が絡んでるのが、隼人。はっきり言って、天才だ。」

明らかに、おざなりな口口紹介だ。

「隼人」

「どうか、百代。それは、周りが好き勝手言つてるだけだろ。」

すこしばかりの反論。

「百代」

「

「なにを言つ。その年で、川神流の新体系を完成させた男が。」

「隼人」

「あれは、俺が戦いやすいように考えただけだ。」

「百代」

「その結果、圧勝していた私を軽く捻れる様になつたと。」

「クリス・黛」

「えつー！」

新人一人が驚きの声を上げる。

「クリス」

「待つてくれ、モモ先輩。だつて、武神とも呼ばれるあなたがか？」

「黛」

「そうですよ。武道四天王の一人であるあなたをですか？」

言いたいことは分かるんだが、あまり大げさに言わないでくれないかな。

「京」

「ああ、そつか。普通はそうだよね。」

「大和」

「兄さん。田立とつとしないから。」

「ユキ」

「田立つと大変な事もない癖に。」

「うう。京に大和にユキ、好き勝手いつてんじやない。

「百代」

「まあ。知らなくても無理はない。クリスとまゆつちは隼人を知つたのは最近だろ。

「コイツは、面倒くさがりだから。勝負も受けないし。」

「一子」

「でも、実際、お姉さまじいちゃんしかまともに戦えないのよね。」

「

いや、それは相性がいいだけだから。

「百代」

「爺の必殺技なんか防げるのはコイツだけだし。」

「隼人」

「あのなあー。単純な殴り合いだつたら俺は勝てねえだろ。」

「百代と俺で言い合つ。」

「大和」

「まあ。ともかく、兄さんと姉さんが戦つたら、殴り合いだつたら姉さん。実戦だつたら兄さんつて訳。」

「隼人」

「まあ、どつこじこじ。このファミリー女子の影響力の方が強い。」

「なんて言つたら、

〈大和〉

「おい。またれや、男子。」

なんか大和が言い出した。

〈大和〉

「武力で勝てなければ知力で勝たばいいのだ。  
勇気を忘れてはいけない。」

〈百代〉

「ほあ」。

〈大和〉

「えつ？」

大和の言葉に反応した百代が大和を捕まえた。

〈百代〉

「よく言つた。弟よ。」

そして、女子陣の方に連れて行かれた。

- s i d e     out -

- s i d e     大和 -

姉さんに女子陣へ引きずり込まれた。

「百代」

「彼が女子に調子を乗らせないだそ'うだ。」

なつ！ そこまで言つてない。

「クリス」

「何だと。」

真つ先クリスが反応しやがつた。

「大和」

「い、異議あり。その意見は拡大解釈だ。」

「百代」

「却下。」

そして、腹部を殴られた。

「大和」

「理不尽だ。」

「百代」

「残念ながら、ここはお前の得意な法廷ではない。獄中だ。  
獄中は理不尽で当然。」

「大和」

「無法地帯だつ」

「京」

「これはいじらなければ。」

京つ！ 貞操の危機！

「大和」

「しかし、ピンチには当然仲間が、」

「キヤツプ」

「じゃあな。大和。」

「岳斗」

「俺様もプライドを捨てたくはないね。」

「モロ」

「さよなら。」

「百代」

「残念。いい仲間持つたな。弟よ。」

姉さんが笑顔で言つ。  
だが、

「大和」

「だが、しかし、まだ、最後の切り札が」

「隼人」

「俺は、傍観してるぞ。まあ、気が向いたら助けてやる。」

兄さんのこれは、助けないという意味だ。

〈大和〉

「神は死んだ。」

- - side out -

- side 隼人 -

〈京〉

「じゃあ、大和。ここからは性と暴力の都だよ。」

〈一子〉

「いい友達を持つた事を感謝することね。」

〈クリス〉

「ああ、全くだ。情けない。」

京、一子、クリスの順で好き勝手いいまくる。

〈キャップ〉

「ふつ、好き勝手言つてくれるぜ。」

キャップが言つ。

〈一子〉

「じゃあ、ここで、大和争奪の戦争でも始める?」

「隼人」

「それもいいかもな。」

「京・一子・クリス」

「えつ？」

俺の一言に、三人が固まる。

「京」

「でも、さつきは傍観するつて。」

「一子」

「うそだよね？ お兄様？」

いや、そのつもりだつたんだけど。

「隼人」

「あれだけ好き勝手、しかも目の前で調子に乗られると……ね

？」

さすがにいい気はしない訳よ。

「一子」

「でも、こつちにはお姉様が。」

「百代」

「すまん。」

「一子」

「えつ？」

「隼人」

「悪いが、お前たちは、もう反撃すらできん。」

「京」

「まさか！」

「隼人」

「蜘蛛の巣」 戦争だとしても、これで終わり。さて、敗残兵はどうしようか

わざと、悪い笑みを作つて見せる。

「隼人」

「岳斗。何がいい？」

「岳斗」

「それはもちろん、ふ、むふふふふふ。」

うわ、気持ちワル。

「クリス」

「待つてくれ。せめて、他のヤツに。」

女子陣もあれは気持ち悪いみたいだ。

「隼人」

「ああっ、それは大丈夫。岳斗も絡まつてゐるから。」

「岳斗」

「なんだと！」

岳斗は声を上げて驚く。

「岳斗」

「なんで、俺様も捕まつてんだよ。」

「隼人」

「だつて、ねえ？」

お前、また気持ち悪い事いいそつなんだもん。

「隼人」

「でも、まあ、放してやるか。なつ、ユキ。」

「ユキ」

「そうだね～。」

「百代・一子・京・クリス」

「～～～～えつ？」

ユキは俺の後から、俺に肩車する。

「ユキ」

「いえ～い。」

「一子」

「なんで、ユキが。」

「隼人」

「最初からユキは、俺の後に逃げてきてた。」

「ユキ」

「いえ～い。」ツンツン。

「百代」

「こら、ユキ。突くな。」

「隼人」

「大和も逃げたし。」

「京」

「えつ」

京は、呆然。

「隼人」

「新人に力も見せたし。」

「クリス・黛」

「あつ」

「隼人」

「放してやるか。」

「そう言つて開放する。」

「こうして、新メンバー二人が加わった。」

△岳斗△

「なあ、俺様、いつまでこのままなんだ？」

岳斗は放置しといったけど。

## 板垣家

- s i d e 亜巴 -

川神市にある重工業地帯。治安が悪い事で有名な地域だ。そこに私達は居を構える。

常に工業地帯ならではの特有の異臭と排気ガスで覆われていて、不良やチノピラがうるさいしているが、特に気にもならない。というよりも、私の兄弟はこういう環境の方が合っていた。

〈亜巴〉

「帰ったよ。」

〈女〉

「おお、今日の貢物はなんだ?」

末っ子・板垣天使がいち早く反応する。

〈亜巴〉

「特上寿司だよ。」

〈男〉

「さすが、女王。貢物もトップクラスか。」

今日の夕飯のメニュー聞いて喜ぶのが次男・板垣竜兵。

〈亜巴〉

「ほり、机の上きれいにしな。」

「竜兵」

「」んなもん、叩き落とせばいいんだよ。」

「女」

「まだよ。今、片付けるから~」

竜兵を止めようとするのが、次女・板垣辰子。

「亜巳」

「じゃあ、食べよつか。」

言いつと同時に、天と竜兵が飛びつく。

「亜巳」

「全く。」

それを尻目に、自分の分ともう一人の弟の分を確保する。

「天」

「マグロもら~」

「竜兵」

「天、テメエ！ マグロ食いすぎなんだよ！」

「天」

「はっ！ 早いモン勝ちなんだよ。」

「竜兵」

「じゃあ、アナ『貰つてく！』

<天>

「テメエ、ウチのアナゴー。」

<辰子>

「二人共、やめなよ。」

騒ぐ二人を止めようと辰がする意味はない。  
この子、言い方はのんびりしますぞ。

<亜巳>

「やめろ。いい加減うざい！」

<天・竜兵>

「「ひつ」」

これで静かになった。

<天>

「あれ、亜巳姉。その皿は？」

天が、私の使っている皿のとなりの皿を指す。

<亜巳>

「これは、悠獅の分。」

<竜兵>

「ああ、なるほど。」

竜兵が納得する。

いつも、私がこうしてるからだろう。

「天」

「悠兄、帰つてくるか分かんないだから、それも食おうぜ。」

なんだつて・・・・・

- s i d e   o u t -

- s i d e   竜兵 -

「天」

「悠兄、帰つてくるか分かんないだから、それも食おうぜ。」

ああ、バカが一人。

「亞巳」

「天。私は、悠獅の分だつて言つたよねえ。」

「天」

「ひつ」

キレちまつた。

亞巳姉は兄貴に関する事で冗談が通じないって、アイツはなぜ理解しないんだか。

今の中に、寿司食つとくぜ。

「亜巳」

「天。これから、自分の飯は自分で用意するかい？」

「天」

「こめん、亜巳姉。それだけは！」

やつぱり、こうなったか。

兄貴は、亜巳姉のお気に入りだからなあ。

「辰子」

「ねえ、亜巳姉。今日は、お兄ちゃん帰つてくるの〜」

そういうば、辰姉も兄貴に懐いている。

兄貴は家に帰つてくると、大抵、亜巳姉と辰姉の相手をさせられて  
いる。

「亜巳」

「言つてなかつたね。今日は、帰るつて言つてたよ。」

兄貴は、家の兄弟の中では、一番家にいない。  
随分前に、一ヶ月音沙汰なしの時があった。  
そんときや、亜巳姉も辰姉も心配していた。  
でも、しばらくして、大金片手に帰ってきた。  
どんな事をしてるかは知つてゐるが、一番謎の多い人物だ。

「悠獅」

「帰った。」

噂をすればなんとやらひつしな。

- side out -

- side 悠獅 -

〈悠獅〉

「帰った。」

二日ぶりに家に帰ってきた。

〈辰子〉

「お帰り。お兄ちゃん。」

辰子が笑顔で返してくれる。

我が妹ながら、よくこの環境でこんな良い子に育つたんだか。

〈竜兵〉

「よつ、兄貴。」

〈悠獅〉

「よつ。」

竜兵に返しながら、亜巳姉と辰子の間に座る。

「悠獅」

「なんで、天は泣きそつた顔してんだ？」

「亜巳」

「気にしなくていいよ。」

天の代わりに亜巳姉が答える。

まあ、いいか。

「亜巳」

「はい。悠獅の分。」

「悠獅」

「ありがと、亜巳姉さん。」

「やつぱり、亜巳姉さんに言つとこで良かつた。」

「亜巳」

「はー。じゅうねー」

「悠獅」

「辰子もありがとな。」

辰子はホントに良い子に育つたな。

「辰子」

「うん？」 クンクン

「うん？」

辰子が俺の匂いを嗅ぐ。

「悠獅

「どうした?

「辰子

「いつもと違う。」

いつもが分からんが、

「悠獅

「新しいヤツが入ったからか?」

それしか、思いつかない。

「亜巳

「また、新しいの見つけたのかい?」

「悠獅

「ああ、才能はある。ただ期待値は低いなあ。まあ、それでも、少しは仕込まなきゃいけないんだけど。」

「亜巳

「悠獅は、いつもそれだねえ。」

「悠獅

「あはは、まあね。」

こんな感じで、夜が更けていった。

「で、なんで俺が呼ばれたんだ？」

今、俺は、岳斗とモロと一緒にファミレスにいる。

「岳斗」

「それはだな。俺様の壮大なる計画「ナンパカ」最後まで言わせろよ。」

「モロ」

「で、いつもと一緒に進歩がないから。先輩呼んだんだよ。」

「隼人」

「進歩がないと気づいたのは進歩なのか。」

「モロ」

「たぶんね。」

いつもつき合はせられるモロに同情する。

「隼人」

「しかし、なんで俺なんだ？」

「モロ」

「キヤップ、今日は、埼玉だつて。」

「岳斗」

「大和は、ナンパなんか成功しないだよ。たくつ、俺様のおこぼれを分けてやるうと言つに。」

〈隼人〉

「キャップは相変わらず。大和は、利口だな。」

はあ、急用だといつから来てみれば。

〈隼人〉

「ホント。岳斗は、相変わらずだよ。」

〈岳斗〉

「まあ、見てるつて。今日の俺様は、一味違つ。」

〈モロ〉

「それ、いつも言つてるよ。」

〈岳斗〉

「しかも、ウエイトレスが、さつきからこいつち見てるだる。脈アリだろ。」

〈モロ〉

「それは、岳斗見てるんじゃなくて、先輩見てるんだよ。」

「こいつらは、暇なんだろうな。」

「そう思いながら、呼び鈴を押す。」

〈ウエイトレス〉

「どうかしましたか？」

「隼人」

「「ヨーヒー、おカワリ。それと、このケーキを一つ。」

「ウェイトレス」

「かしこまりました。」

ケーキでも食つて帰るか。

「岳斗」

「おいおい。先輩なんで、ウェイトレスに何も言わないんだよ。」

「隼人」

「お前と一緒にするな、岳斗。それと、お前のおじりだからな。」

「岳斗」

「なんでー。」

「隼人」

「おいおい。急用と言つてナンパの手伝いさせて、なんの謝礼もないのかい、岳斗くん？」

とびきりの笑顔で言つてやる。

「岳斗」

「わ、分かったよ。くそつ。」

「隼人」

「そう言つなよ。太つ腹な所を見せれば、少しほ可能性も上がるんじゃないか？」

「岳斗」

「うむ！ なるほど。よし、今日は、モロモロがいいやつだ。

扱いやすい奴め。

モロに向かつて、笑つてみせると、

「モロ」

「はは、ありがと。岳斗。」

苦笑にしてやがる。

「ウモイトレス」

「ノーヒーとケーキになります。」

おつ、来たか。

「隼人」

「んじや、 いただきます。」

わらわと食つて、帰る。

その後、いろいろ岳斗に吹き込んでから帰つてきた。  
ファミレスとかで働いてる子に對して、おじつたぐらいでプラスになるとでも思つてゐる岳斗に合掌。

そんな事を考えながら、自分の部屋へ向かう。  
ちなみに、俺の家は、川神院。  
とある事情で、子供の頃に引き取られてから、ずっと川神院で暮らし  
てる。

「百代」

「おい、隼人。どこにいってた?」

「隼人」

「その前に、なぜ、俺の部屋にいる?」

だから、こいつ風に百代が入ってきたりしててる。

「百代」

「暇だった。だから、お前で遊ぼうかと。」

「隼人」

「何かしら、趣味でも見つける。岳斗みたいナンパの毎日でも困る  
が。」

「百代」

「岳斗は、懲りずにナンパか。」

「隼人」

「それに訳も分けらず、呼び出されたから、いひじり食つてきた。  
岳斗の金で。」

「百代」

「なつ、おじりなら私も呼べよつて。」

「隼人」

「面倒だ。」

「百代」

「くつ、くつなつたら憂さ晴らしだ。」

「隼人」

「その前に、ちゃんと隣の部屋に帰れ。」

百代の部屋は、俺の隣。

更に言つなら、百代の隣は一子だ。

「一子」

「お兄様。助け。」

今度は、なんか一子が助けを求めてきた。

「隼人」

「どうかしたか？ 百代に下着でも盗まれたか。」

「一子」

「そうじやなくて、明日までの宿題が分からぬのよ。」

涙目になつて、訴えてくる。

まあ、一子に泣きつかれる事は、一度や一度じゃない。

「隼人」

「まあ、いいだろ。ほら、持つて来い。」

「一子」  
「はい。」  
「

「隼人」  
「たくつ。という訳だ。百代、出る。」  
「

百代は耳を塞いでいる。

「隼人」

「全く、お前も少しば、勉強しろよ。」  
「

「百代」

「隼人。私は、大変な事に気づいてしまった。」  
「

「隼人」

「なんだ？ 聞くだけ聞いてやる。」  
「

「百代」

「私たちにも宿題がある。」  
「

「隼人」

「だな。」  
「

「百代」

「なぜ、驚かない！」  
「

「隼人」

「いや、終わってるし。」  
「

「百代」

「

「隼人」。

「隼人」。

「断る。自分で努力しない奴に見せる価値はない。」

」

「百代」

「頼むよ」

こうして、夜は更けていく。

## ゴールデンウイーク

ただいま、俺達、風間ファミリーは箱根に向けて旅行中。

その理由は

「モロ」

「全く、毎度毎度、キャップは何かしら引き当てるよね。」

「岳斗」

「今度から、福引キングとでも呼ぶか。」

キャップが、福引で当てた。

その本人は、

「キャップ」

「お宝~~~~」

夢の中。

移動の電車の中なのだが、

岳斗・モロ・大和・京チーム

「岳斗」

「ああ、モモ先輩。俺様におこぼれくれないかな?」

「モロ」

「それは無いね。」

「大和」

「姉さんに限つてそれはないな。」

「京」

「ちなみに、岳斗。それダウト。」

クリス・由紀江チーム

「クリス」

「で、まゆつち。箱根の名物はなんなのだ？」

「まゆつち」

「なんでしょうか？ 私も箱根には行った事がないので。」

キヤツプ・一子・ユキチーム。

「「「「「」」」」

百代は、単独で女子大生をナンパに行つた。

ちなみに、俺は、

「隼人」

「おい、大和。この状況、俺はどうしたらいいと思う？」

「大和」

「どうしたらいいだるう？」「

ただいま、ユキが俺のひざの上に座つて寝ている。

「隼人」

「どうか、なんでユキは、いつも俺のひざで寝るんだ？」

「モロ」

「ユキは、先輩に懐いてるからね。」

「岳斗」

「座り心地なら俺様だつてなかなかだと思つぞ。」

「京」

「岳斗は、硬そう。」

「大和」

「寮に入る時だつて、兄さんと住むつて愚図つたしね。」

「そう考へると、まだいい方なのか？」

「モロ」

「でも、先輩に懐いてるのは、ワン子もだよね。」

「京」

「先輩は、二人に何をしたんだか。クツクツク。」

京が、悪い笑みを浮かべている。

「隼人」

「京。」

京が、悪い笑みを浮かべている。

「京」

「は、はい！」

「大和・モロ・岳斗」

「 「 「 ！？」 「 」

とりあえず、黙つたか。

〈モロ〉

「ねえ、今、どこかで見た事あるような

〈岳斗〉

「ないよ」

〈大和〉

「あつ、ウチの両親だ。」

「 「 それだ！」 「

「ユキ」

「隼人～。おぶつて。」

「隼人」

「キャップはじやあな。ユキは・・・まあいいか。」

ユキをおぶつて、キャップを放置。  
まあ、大和がなんとかするだろ～。

えつ？ 一子？

一子は、

「一子」

「クリ。旅館まで、勝負よ！」

「クリス」  
「ふん。望むところだ！」

走つて行つちやつたよ。

「岳斗」

「ほり、起きる。キャップ。」

「京」

「山が待つてゐるよ。」

「キャップ」

「なに！ 山が俺を待つてゐるぜ～！」

「いつも復活した。

まゆつち  
まゆつち

「いつも場合まゆつちた。」

隼人  
隼人

「迷つてゐんだつたが、いつも乗れ。まゆつち。」

＜キャップ＞

「よつしゃー！ 釣りだー！」

キャップが、走って釣りに行く。

昨日は、全員旅館で自由に過ごしてた。

＜岳斗＞

「はんつ。俺様の方がでかいのを釣つてやる。いつもキャップに負けてられるかよ」

＜モロ＞

「元気なのはいいけど、釣竿壊さないでよ。」

＜大和＞

「じゃあ、皆で勝負でもするか。もちろん、大きさと数で。」

男どもは、さつそく釣り始めたか。

＜クリス＞

「おお。日本では、免許がいらないのか。」

＜まゆつち＞

「いえ、必要なところもあるんですが、ここは観光地なので。」

新人一人も楽しんでるよつだ。

「百代」

「それじゃあ、稽古するか。」

「百代」

「はいー。姉様。」

「百代」

「京は、接近戦の稽古な。」

「京」

「謝々」

「つちひなひつちひで、稽古を始めたか。」

「隼人」

「お前も、たまこは、混びつたらどうだ、ユキ?」

「ユキ」

「マシユマロ~」

「クリス」

「キヤッپ」

「お、おい。餌がないで。」

ユキは、胡坐かいでる俺の腰の間に囁きかかっている。

「うわっ、もう釣つてゐる。野生児だね、もひ。」

「モロ」

「そんなモン、現地調達だー。よつしゅーーー。まあまーーー。」

「大和」

「しかも、結構でかいぞ。」

「岳斗」

「くそお～。サカナよ～。来～い。俺様の所に来～い。」

なんで、岳斗はあんなに必死なんだ？

目の前では、釣り。後ろでは、武術。  
なんだこの力オス。

一子と京は、森の中に入つていった。

「隼人」

「京は、どんどん強くなつていくな。なつ、大和。」

「大和」

「兄さん。俺は、京が強くなる度に安眠が遠のくんだが。」

「隼人」

「まあ、京が遠距離タイプの弓使いで良かつたな。近距離タイプだ  
つたら大変だつたな。」

「大和」

「やめてくれよ、兄さん。」

「百代」

「そう言つても、”蜘蛛の巣”とか京に教えない辺りが大和への優  
しさのなんだろ？」

「隼人。」

百代がこっちに来ていた。

「ユキ」

「そういうモモ先輩は、京を鍛えるんだよね~」

ユキも会話に参加する。

「百代」

「私は、恋する乙女の味方だからな。」

「大和」

「でも、自分の事はままならないのでした。」

そう言つた瞬間、大和は逃げ出した。

「百代」

「その負けん気は買うが、」

百代の雰囲気が変わつた。

「百代」

「今、お前は言つてはならない事を言つた。三十秒待つてやる。」

「隼人」

「百代。」

百代に目線を向ける。

百代も頷いてくる。分かったようだ。

まあ、その瞬間に大和を追いかけてつたけど。

「まゆつち」

「あの、隼人先輩は、釣らないんですか？」

まゆつちが声をかけてくれる。

「隼人」

「いや、大丈夫だ。もう別のが、釣れたから。」

「まゆつち」

「へつ？」

「隼人」

「んじや、いつちはよろしく。まゆつち。」

「まゆつち」

「あ、あのつ」

「隼人」

「行くぞ、ユキ。」

「ユキ」

「行く行く」

とりあえず、ユキを連れて森に入る。

<ユキ>

「う~ん。もう一人は、だ~れだ?」

<隼人>

「さあな。」

一子と京、あともう一人。

<ユキ>

「う~ん。結構強い人なのね~ あつ、モモ先輩も遊んでるみたい  
~ うりゅ~」

<隼人>

「さすがだな、ユキ。」

ユキは、ウチのファミリーの中でも目立たない方だ。

だが、百代を除く女性陣の中では恐らく、二番目に強い。

俺の勘が正しければだが。

特に、危機管理能力が高く、気配察知に関しては俺や百代にも肩を並べるかもしねり。

格闘センスは、まだ底が見えない。伸び盛りだ。

学力もトップクラスだし。

「ユキ」

「あ、いたよ~」

そこには、一子と京と闘つ軍服の眼帯さんがいた。

「一子」

「くわ、こー！」

「京」

「ちつ、モモ先輩程じゃないけど、強い！」

「眼帯さん」

「子ウサギが、私を倒せるなどと思わないことです。」

「一子・京」

「あつー。」

しかも、きついのが入る瞬間だ。

「隼人」

「はい、そこまで。」

そんな事させないけど。

「一子・京・眼帯さん」

「お兄様！」「隼人先輩！」「なつー。」

「隼人」

「よつ」

驚いた顔をする一人に手を振つてみせる。

卷之二

「なんですか、あなたは？」  
答えるさういふ

〈隼人〉

「まあ、そいつの仲間だよ。後悔したくないんだ。  
俺達旅行中だからさ、怪我させられないから、終わりな。」

メモ帳へ

あなたがおまかせを聞くと思つてゐるのですから

やる気満々みたいだね。  
でも、

「悪いけど、もう終わってるんだよ。」  
隼人

もつ絡め捕らせてもらつた。

八 雜記

-101のJU、JU、JU-

うわっ、この人、興奮してる。だめだ。

卷一

「仕方ない。一回、頭冷やしてもする。

眼帯さんへ

「はつ！」

糸を解いた瞬間に、殴りかかってきやがつた。

でも、

「隼人」

「んじや、終わり。」

高速で眼帯さんに接近。

前から、首の裏と顎の当つを支えて軽く捻つてやる。

「隼人」

「いっちょ上がり。」

氣絶した眼帯さんを抱きかかえてやる。

「百代」

「なんだ終わつたか。」

百代も合流したようだ。

「隼人」

「ああ。おわつ」

振り返るうとしたが、振り返れない。  
だって、なんかすごいプレッシャーが。

「百代」

「なあ、隼人。」

「隼人」

「なんだ？」

「百代」

「今の状況は、なんだ？」

今の状況？

氣絶してる眼帯さんを前から抱きかかえている。  
何も知らない人が見たら、かんちが・・・・・。

「隼人」

「百代さん。」

「百代」

「なんだ？」

「隼人」

「弁明の機会は？」

「百代」

「ない。」

さらば、人生



訳あつてといふか、作者の考へから元輝の名前を変えました。  
あしからず。

父様

「百代」  
「で、とりあえず、ここのは誰だ？」

地獄からの生還。

ただの空気がとてもうまく感じる。

「一子」

「知らないわ。京と組み手をしてたら、いきなり襲ってきたのよ。」

「京」

「しかも、モモ先輩達ほどでないにしろ、かなり強いときました。」

「コキ」

「シンシン」

「隼人」

「コキ。やめなさい。」

でも、軍服着てるんだよね。

「隼人」

「百代。そつちは、どうだったんだ？」

「数ばかりで退屈だった。」

「百代」

「隼人」

「俺達の中で、軍人と関係のありそうな奴は・・・・・・」

「一子・京」

「あつ・」

一人しかいないか。

とりあえず、眼帯さんを担いで他のメンバーと合流に向かつ。すると、

「男」

「うむ。では、楽しめていいようだ、良かったぞ、クリス。」

「クリス」

「はい。父様。」

なんか、いかにもお偉いっぽい軍人さんがいるんだけど。

「まゆつか」

「あ、みなさん。」

まゆっちが真っ先に気づいたようだ。

「隼人」

「こつちは、なんともないようだな。まゆっち。」

「まゆっち」

「はい。ところで、その人は？」

「隼人」

「ああ、この人はっ」

「クリス」

「マルさん！」

「男」

「マルギット少尉！」

なんか軍人親子が、過剰反応してるよ。

「男」

「貴様！ 少尉に何をした！」

しかも、銃を構えだした。部下も含めてね。

人生でこんなに大量の銃口を向けられる奴が何人いるだろう。

「隼人」

「ちょっと、興奮して話を聞かないものでね。軽く寝かしつけただけですよ。外傷はありません。」

「男」

「さうか。少尉は、少々闘いに固執する傾向があるからね。」

いや、あれは少々では・・・・・・・・  
ウチにもバトルマニアがいるけどさ。

「隼人」

「まあ、とにかく、起こしてやるか。」

一度、そのマルギッテとかいう眼帯さんを下ろしてやる。  
そして、

「隼人」

「起きなさい。」「キッ

「眼帯さん」

「くっ。私は・・・・・・・・」

おっ、状況確認してる。さすが、軍人。

「隼人」

「お目覚めの気分はどうかな?」

目が合つた。

「眼帯さん」

「・・・・・・・・・・・・・・

「隼人」

「どうした?」

◀ 眼斑れん ▶

一  
な  
う

「隼人」

ノルマニヤ

なああああああああああああああああああ

なんか叫んで、凄い後ずさつた。

「またなんだ、これ。」

大和

一元さん、相変わらずた

七〇八

先輩にかかるは、壁にならんなど云ふね。

こら、京と大和、それにモロ。

卷之三

此ノハノルニ。

「まゆつち」

「なんか、隼人先輩と一緒にいるよくなつてから、よく見ますよね。この光景。」

「一子」

「まあ、お兄様は無意識だから。」

「まゆつちと一子もなに達観してる！」

「百代」

「これは、またお仕置きが」

「ユキ」

「隼人・・・・・・」

あの、百代さんとユキさんは怖いから。

「男」

「大丈夫か！ 少尉。」

「眼帯さん」

「中将殿。ええ、大丈夫です。」

その割に顔がかなり赤いんだけど。

「眼帯さん」

「あなた。名乗りなさい。」

俺を指差して言つてきた。

「隼人」

「人の名前を問う時は、自分からと言つのは日本だけの常識なのかな。」

軽い嫌味。

「眼帯さん」

「そうですね。私は、マルギッテ・エーベルバッハです。覚えなさい。」

「隼人」

「マルギッテね。俺は、伊達隼人だ。」

「マルギッテ」

「伊達隼人？ では、あなたが……」

「男」

「どうした？ 少尉。」

「マルギッテ」

「中将殿、彼が盾です。」

「男」

「ほう。君が……」

あの、人をほつといて、品定めみたいに見ないでほしいんだが。

「男」

「そうか。では、私も名乗つておこう。フランク・フリードリヒだ。」

よろしく頼むよ。」

「隼人」

「ええ。よろしくお願ひします。」

まあ、とりあえず、一件落着？

## つかの間の休息

- s i d e 大和 -

あの後、なんか凄い顔で、クリスを頼むとか言ってフランクさんは帰つていつた。

その後は、とりあえず皆で釣りして、今は温泉に入つてゐる。

男湯・・・

＜キヤップ＞

「うつはあー こんな風呂、毎日入りてえなあー」

＜モロ＞

「あれ？ 以外にキヤップ、温泉好き？」

＜キヤップ＞

「いや、眺めいいじやん。風呂は対して気にしてないけど。この景色はいいねえ。」

＜岳斗＞

「はつ。見よー。」の肉体美ー。」

岳斗が、ポーズをとる。

＜モロ＞

「うわつ。やめてよ、岳斗のグロイんだからー。」

＜キヤップ＞

「何気にしてんだ？ 別に男同士なんだから気にしなくていいだろ。」

「

「モロ」

「キャップと岳斗は、堂々としそぎだよ。」

モロのジッコリは、平常運転だな。

「岳斗」

「まあ、俺様の息子は、例えるならバズーカだな。」

「大和」

「されど未だに実践射撃はなく、訓練のみ。」

「岳斗」

「やうなんだよ。砲身は磨いてるのに。磨きすぎで擦り切れそうだ。」

「

俺とモロは、軽くひく。キャップは分かつてない。まあ、性に目覚めてないし。

「岳斗」

「やう言つお前の愚息は何なんだよ？」

「大和」

「俺のは、マグナムだな。重い一撃をズドンつと。」

「岳斗」

「キャップは、マシンガンつてとか？ 連射性がありそうだ。」

「キヤップは、マシンガンつてとか？ 連射性がありそうだ。」

「大和」<  
「確かにな。」>

卷之八

モロは、水鉄砲、ホルスター付きなど。

V 口 手 ^

「ふるわいな！ 僕たって、好きでじうなうた詠じやないよ！」

出でや飯にしてゐんだから、言ねないでやればいいのさ。

「何、それってもしかして。」  
「キヤツプ」

「大和」  
「キヤッピ。オブラーートに。」

「剥けてないのか？」

V □ □ □ ^

大和

「直球に言つておきやうね。」

ナニヤシナハ

「ええ、ちゃんと包んで書いたね。」

卷之六

「言葉に殺しが入ってる。」

モロ、軽く泣きやうだよ。

＜大和＞

「後は、一番気になる奴だ。」

＜岳斗＞

「セイは、同意。」

＜モロ＞

「うん。」

岳斗の言葉に、頷く俺とモロ。

＜隼人＞

「お前ら、少し静かにしろよ。外まで聞こえるぞ。」

来た！

- s i d e   o u t -

「隼人」

「おい。どうした？」

「大和」

「いや、兄さんの息子は、どんな物かと。」

「岳斗」

「といふか、立派だな。」

「大和」

「岳斗の表し方を借りれば、RPGつてどこか？」

「モロ」

「うん。それには、僕も納得。」

「岳斗」

「俺様で、対抗できるか？」

「大和」

「ううん。何とかできるんじゃないかな。」

「モロ」

「それにしても、女湯は静かだね。」

「隼人」

「お前らが騒ぎすぎなんだよ。」

「岳斗」

「意外と聞き耳たてたりしてな。」

「隼人」

「バカが。そんな露骨な奴は、お前ぐらいだ。」

- side out -

- side 女湯 -

「京」

「だがしかし、私は露骨だつたのだ。」

「百代」

「しかし、これは、凄い会話ですね、京殿。」

「京」

「ええ。百代どの。ところで、マグナムって、どんな銃?」

「百代」

「大口径なら熊も殺せる、立派な銃だ。」

「京」

「さすがだね、大和。」

「百代」

「弟のくせにそんな危険なモノを隠し持つていたか。」

「京」

「ところで、RPGって……」

「百代」

「しかも、虹斗の自信が揺らぐものか。」

「京」

「あれだけ、いつも威張つてゐるのにね。」

「百代」

「・・・・・・・・・・」

「京」

「モモ先輩。」

「百代」

「なんだ？」

「京」

「心構えだけは、しかないとね。」

「百代」

「そうだな。」

<百代・京>

「…………」

<一子>

「あつ！ ゴキがのぼせた！」

<百代>

「なにつ！ 早く引き上げるー。」

- side out -

- side 隼人 -

<隼人>

「なんだ？ いきなり騒ぎ出したな。」

<大和>

「どうせ、姉さんがまゆつちやクリス辺りを襲いだしたとかでしょ。」

「

<隼人>

「そうだな。」

「

いい湯だ。」

## 川神院の旋

「ゴールデンウイークも終わる直前の夜。  
旅行からも帰ってきて寝ていたが、  
爺とルー先生に呼び出された。

〈百代〉

「おっ、来たか。」

〈隼人〉

「百代もか。という事は、あれね。」

俺と百代、爺にルー先生。

この四人が集まるという事は、話題にあがるのは一つ。

総師範に総師範代。その候補筆頭に総師範の孫。

この顔が揃う時に話す話題は、大抵、川神院の今後。  
ちなみに、総師範代候補筆頭とは、俺のことね。

俺に、そのつもりは無いが、師範代の人達が推していくんだよね。

〈隼人〉

「このタイミングで呼ばれるという事は、一子の事か。」

〈爺〉

「そうじゃ。」

〈ルー〉

「そうだネ。そろそろ、結論を出さなきゃいけないだろ？ うネ。」

百代の言葉に、爺とルー先生が答える。

「の話題が話されるのは、今回が初めてじゃない。

爺とルー先生は、一子に武の才能がないといつ事で違う事をさせた方がいいと思っているのだが、

一子が努力する姿を見て、今まで結論を延ばしているのだ。

「百代」

「爺の考えは、変わらないのか。」

「爺」

「そうじやな。一子の努力は、確かに認める。が、川神院の強さの質を落とさぬためにも、川神院の捷に従おうと思つ。これは、川神院の総師範としての意見じや。」

「ルー」

「そうですね。私も一子の努力には報いたい。ですが、このままでは、師範代にする事はできません。」

爺とルー先生は、難しそうな顔をしながら言つ。

「百代」

「一子・・・・・・・・」

百代も確かに一子の努力は認めている。だから、なんとか師範代にしてやりたい。

だが、総師範候補として、妹を甘やかすことができない。

その二つの意見が交差して、頭を悩ませているのだろう。

そして、一子の川神院の役に立ちたいといつ理由を笑顔で話す様子が頭をよぎつて、

師範代にできないのが悔しいのだらう。

＜爺＞

「モモも意見は、同じのみぢやな。」

首は振らない。

俯いて黙つてこる。

＜爺＞

「一子にはかわいそうな話じやが、師範代になる人間とは、根本的に違つからう。」

＜ルー＞

「そうですね。師範代の試験すら、今の実力では受けんには値しませんからネ。」

＜百代＞

「だがつー！」

ルー先生の言葉に百代は食いつかんとするが、つまべ言つ返せない。

否定する言葉が見つからないのだらう。

そのまま、3人とも沈黙する。

＜爺＞

「所で、隼人よ。お主から見てはびひ思ひ。」

爺が、さつきから一言も喋らない俺の意見を求める。

「ルー」

「総師範代候補筆頭の意見も聞かなきやイケナイネ。」

「隼人」

「・・・・・」

3人の視線が俺に集中する。

「隼人」

「確かに、今の実力では、試験を受けるに値しないだろ?」

「ルー」

「やはり」

「百代」

「・・・・・」

「爺」

「それでは、このと「だがつ」」

ルー先生の言葉を遮る。

「隼人」

「まだ成長の余地がある。」

「爺」

「それはそうじやううが。」

「隼人」

「だから、俺が、一子を夏休み終わりまでは、鍛えあげよう。」

「爺」

「それで、師範代にふさわしい実力が身に付くと?」

「隼人」

「ああ。一子は、自分の本当のスタイルを見付けてないだろうし、そのための技を持っていないだけだろう。」

「百代」

「スピードを生かす事が、一子のスタイルではないといふのか?」

「隼人」

「違う。俺と百代のタイプで派閥を分けると、川神院のほとんどは百代のタイプだ。」

「だが、一子は、おそらく俺と似たタイプだろう。」

「百代」

「お前のような技を身に付けるといふのか。」

「隼人」

「違う。攻撃主体か、防御主体かという事だ。」

「もちろん、百代が攻撃で俺が防御。」

「隼人」

「だから、夏休みに師範代の試験を行う。そこで、結果を出さう。」

百代・爺・ル一

Γ Γ Γ • • • • • • Γ Γ Γ

3人は俺の言葉に黙ってしまった。

卷八

「分かつた。夏休みが明ける前に一子の師範代試験を行う。」

「頼むな、爺。」  
「隼人」

爺の言葉に、少し安堵した。

これで、少なくとも俺が力になつてやれる。

卷八

「ほつほつほ。しかし、ねえこれでもいいんだよ。」  
一子に期待してしまう。」

〈隼人〉

「期待してやがれ。」

ルー

「その才を見る目。君には、更に川神院の総師範代になつてもらい  
たくなつてきたネ。」

隼人

「それは言わないでください。」

総師範代なんて、正直興味ないんだよ、俺は。

それにちやんと生かしてやらないと、見極めたことにはならない。

「隼人」

「それでは、この事は俺から一子に伝えとります。」

「爺」

「ほつほつほ。 それでは、今日は休みなさい。」

「隼人」

「じゃあな。」

俺と百代は、部屋に向かった。

「隼人」

「なあ、なんで黙つてんだ？」

「百代」

「いや、お前の方が、一子をよく見ていろと思つてな。

私なんか、一子を待ってるしか考えなかつたのに。

姉失格だな。」

何黙つてるかと思えば、

「隼人」

「阿呆。」

「百代」

「な、なんだと…」

「こいつは昔からバカだ。」

「隼人」

「お前は、アイツの目標であり続ければいいんだよ。アイツを励ましてやるの、兄の俺の仕事だ。」

「百代」

「だが！」

「隼人」

「黙れ。」

姉のお前が目標で、兄の俺が励ましてやる。俺達の妹を支えてやるには、それで十分だろうが。

他の事は、いやでもファミリー連中がカバーしてくる。」

「百代」

「そう、だな。」

「隼人」

「お前が落ち込んでビリする。」

「百代」

「いや、私の周りにはできた奴が多いと思つてな。」

「隼人」

「じゃあ、百代が辛い時は、いつもみたいに泣きついてきていいぞ。」

「

「百代」

「なら、隼人は私に泣きついていいぞ。」

「馬鹿が。俺にそんなのいらねえよ。んじゃな。」

後ろの百代に手を振つて、部屋に入る。

- side out -

隼人は、部屋に入つていった。

- side 百代 -

なにが、 いらないだ。

強がりを言いおつて・・・・・

昔から隼人は、 ファミリーの兄的ポジションにいる。  
皆をフォローして、 ファミリーがいつも笑っているよつ。

アイツは、 ファミリーを守る城のようなヤツだ。

いつもは開けつ広げだが、 いざという時は無敵の城塞と化す。

アイツが私達を包んでいるから、 今のファミリーがあると私は思つ  
ていた。

だが、 そんなアイツをフォローできる奴は誰なのだろうか。

それが、 最近悩みだつた。

できれば・・・・・

- s i d e   o u t -

- side 悠獅 -

久々の自分の家。  
そのせいなのか、いつもより多く寝てしまった。

「悠獅

「こしても、眠い。」

でも、いつまでもこいつしてゐる訳にもいかないんだよね。

「悠獅

「とりあえず、起きつ

あれ、右腕が全く動かない。

そして、なにやら柔らかい感触を感じる。

「悠獅

「またか。」

布団をめぐると、辰子が右腕に抱きついて寝ていた。  
まあ、初めてではないし、とこつか家で寝ると大抵こりだし。

「起きあづね、辰子。」

「悠獅

「こよ子」

駄目だ。完璧に寝入ってる。体を揺さぶっても、どう起きなこだらう。

「悠獅

「仕方ないか。そりやー。」

わき腹に踵を落とす。

「十郎

「おふひ。な、なに?」

「悠獅

「辰子。俺の手を離してくれ。」

「十郎

「はー。」

「辰子は、素直でいい子なんだよね~

代わりってわけでも無いんだけど、頭を撫でてやる。

「十郎

「えへへ。」

嬉しそうに笑ってる。

和むな~

「悠獅

「さじ、俺行くが。」

「お嬢子」

「つよ。お兄ちゃん、またね～」

辰子に見送られて家を出た。

さて、俺の根城に行きますか。

「竜兵」

「兄貴。出かけるのか？」

と、思つたら竜兵が戻つて來た。

「悠獅」

「おひ。元氣にしてね～」

そのまま、手を振つて別れたけど。

「悠獅」

「にしても、ここは相変わらず治安が悪いよね~」

少し良くなれば、そこら辺一帯血痕とかすぐ見つかるし。  
夜になれば、流血沙汰なんか見ない日があるのかな~ってレベル。

「男」

「おい、ガキ。」

「こいつ風に絡んできたりする奴もしそうだ。

「男」

「聞いてんのか、おい。」

「悠獅」

「すいません。少し考えてたもので。」

相手は、体格の良い男。あきらかにパワータイプ。

「男」

「でだ。テメエ、少し付き合へ。ちょうど、イライラしててな。」

ボコりたいのね。

「亜巳」

「おい、豚。」

あれれ~。なんで居るのかな。仕事じゃなかつたつけ。

<男>  
「誰が豚だ、この野郎！」

<亜巳>  
「黙れ、豚。」

男が振り返ったと思ったたら、横に倒れた。  
そして、表れたのは、

<亜巳>

「たぐつ、私の弟に手え出してじやないよ。」

<悠獅>

「亜巳姉。 ありがと。」

<亜巳>

いや、一瞬だつたよ。  
さすがだね。

<亜巳>

「気をつけなよ。悠獅は、絡まれ易いんだから。」

<悠獅>

「分かった。それじゃあ、俺行くから。」

亜巳姉は、強いなあ～

俺の根城は、親不孝通りにあるビルだ。  
そこは、目の前の通りを人が通るのだが、あまり目立たなく人に関心を持たれるような建物でもないため、根城としては最適だと俺を思つてゐる。

俺に用がある人以外は入つてこないし。  
ま、俺に会いに来る奴なんて、たかが知れてるけど。

〈悠獅〉

「これはこれは。」

だから、見知らぬ男が立つてゐるなんて珍しい。

〈？？？〉

「柳瀬悠獅さんですね。すこし、お話が。」

これは、楽しくなるかもしね。

一子、修行開始。百代、裏方。

- s i d e   一子 -

<隼人>

「ほら、反応が悪い。自分がどの部分を使つてるかを理解しろ。」

<一子>

「はい！」

今日は、いつものランニングをせずに、朝から軽い組み手をしていた。  
私が、朝から組み手をする事はたまにあったのだけど、相手がお兄様なのは初めてだった。  
しかも、私を強くするためにしばり付きつきりで修行をしてくれる。

<隼人>

「ほら、まだだ。理屈で考えるな。お前に理屈なんて求めてない。」

だったら、私はやるしかないわ！

<一子>

「もう一本！」

- s i d e   o u t -

〈隼人〉

「じゃあ、朝はここまでな。自主練は構わないが、俺の指導の支障になるような事はやめろよ。」

爺達との話し合いからは、二日が経過。

さすがに、まだ成果は出せない。当たり前だが。

それでも、自分の判断に間違いは無いと確信している。

〈一子〉

「はい！ ありがとうございました。」

一子の人生を俺が握っていると考へると鬱だな。

〈隼人〉

「んじゃ、飯食つて学校だ。それと、忘れるなよ。」

〈一子〉

「はい。」

俺が、一子に言ったことは一つ。

常に体のどこかの部分をどのように使つていてるかを意識し、無駄な力を使わない。

今のところ、これだけ。

でも、これができれば動きは明らかに変わる。

「隼人」

「俺も飯に行くか。」

まあ、先は長いがね。

「百代」

「「」苦労され。」

う、うん？

目の前には、百代が水を差し出している。

とりあえず、百代の額に額をあわせ、

「隼人」

「熱はない。」

「百代」

「熱なんかあるかー。お前は、私をなんだと思つていいー。」

顔を真っ赤にして言つてくれる。

いや、だつて、

「隼人」

「お前、今までそんな事した事ないだろ。どつした？」

むしろ、それは俺の役だった。

「百代」

「いや、お前にワシ子を任せきりなんだ。なら、少しでもお前のサ

ポートをしないといけないと思つてな。」

まあ、言つてゐる事はわかるが、なぜにモジモジしながら上田づかい  
で言ひ。

「百代」

「だからだな。これからは、私がお前のサポートをしてやるからな。」

「

「隼人」

「分かつたが、顔を真つ赤にして言ひ事か?」

「百代」

「つるさい!」

「あ、行つちやつた。」

まあ、サポートしてくれるならありがたい。

お言葉に甘えましょう。

「side out」

「大和」

「side 大和」

「で、どうした?」

「百代」

「いいから何も言わずに食べろ。そして、感想を言え。」

状況を整理しよう。

朝、登校中、ファミリーと合流。  
うん。そこまではいい。

そして、兄さんとユキがいつもの如くじやれ合い始める。  
そしたら、姉さんが詰め寄つて来て、差し出してきた。唐揚げを  
・  
・  
・

「大和」

「どうあえず、食べればいい?」

「百代」

「さつさと食べろ。」

おやおやおやおやの口に運ぶ。

「大和」

「えつー。」

「百代」

「どうした?」

「大和」

「普通に凄くうまい。・  
・  
・」

「百代」

T

大和

「姉さんて料理得意だった？」

百代

男はそこへいって調てもなし

「どうか、今の姉さん。」

奴さが、何處へ云せん。主の反覆の力いかん。」

卷之九

四〇九

- side out -

- side 隻人 -

今は、昼休み。といつ訳で、まずは、腹ごしらえ。  
弁当は鞆のな。

「隼人」  
「…………おい、百代。」

「百代」

「な、なんだ？」

「隼人」

「食つたな？」

「百代」

「なんのこ？」

「隼人」

「食つたな？」

とびきりの笑顔でくれてやる。

「百代」

「はい。食べました。」

つたぐ。

「隼人」

「仕方ない。買って来るか。」

席を立ち上がりうど、

「隼人」  
「なんだ？」

百代が服を掴んで立てない。

「百代」

「その、なんだ。」

なんか、モジモジしてるとなんだが。

「女子」

「ねえ。なんか今日の百代さん、いつもと違つね。」

「女子」

「うん。なんか女の子みたい。」

ほら、周りも言つてる。と、いうか、百代は女だろ。

「百代」

「弁当は、私のをやる。だから、食つとい。」

「隼人」

「あ、ああ。ありがとう。」

”ボンツ”

ん？ なんだ？ なんか顔真っ赤で湯気ふいてつけど。

「百代」

「食べたら、机に置いといてくれ

「百代」

「食べたら、机に置いといてくれ

「隼人」  
「うわ、速。」

おもいつきり走つてつた。

弁護をあけると、いつも川神院の弁護じやないのに気づいた。

〈隼人〉

「サポート」してくれるのね。

「隼人」  
「にしても、うまいなあ。」

いつの間に、こんなにうまくなつたんだか。

## 一子進化（ちよつぴり）

- side 隼人 -

〈隼人〉

「はい、ここまで。大分、まともになつてきたな。」

〈一子〉

「えへへ、そつかなあ。」

〈隼人〉

「でも、調子に乗れる程じやないな。」

〈一子〉

「あつつ。」

今日も一子に稽古をつけている。

正直、体の使い方は今までの比じやない。

ま、だからもの凄く強いのかつて言つたりやうでもないけど。

〈隼人〉

「じゃあ、次だ。もう一段上げるぞ。」

〈一子〉

「はい！」

うん。元気良いのは良い事だ。

そして、登校中

〈男〉

「私は、雲野十蔵。川神百代殿、又は伊達隼人殿のどちらかと決闘して頂きたい。」

お、久々の挑戦者か。

〈男〉

「そして、できれば私の弟子とも相手を願いたい。」

弟子付きか。ちょうどいいぐらいの強さの奴だな。

〈隼人〉

「一子。お前が弟子の方の相手をしろ。」

〈一子〉

「はい！」

「クリス」

「待つてください、隼人先輩。」こは自分が。」

一子に戦わせようとしたら、クリスが志願してきた。

「一子」

「ちょっとクリ！ 私が闘うのよ！」

「クリス」

「いいじゃないか。自分もたくさんの方人と手合わせしてみたい。」

しかも、クリスに反応して一子も騒ぎ出した。

「隼人」

「はあ。いいから一子。闘つて来い。」

「一子」

「わい。行つてくるわ。」

「クリス」

「む。隼人先輩。」

クリスがむくれている。

「隼人」

「クリス。忘れてるかもしれないが、これは一応、川神院の正式な決闘なんだよ。」

それを川神院の門下生でもない奴にさせられる訳がないだろ。」

「岳斗」

「あれ？ でも、俺様、前に北海道から来た兄弟ぶちのめしたぞ。」

岳斗は、前に嫁探しに来て百代を嫁にしようとした兄弟と闘つた事がある。

「隼人」

「あれは決闘でもないだろう。なんで、礼儀のない奴にこちらが礼を尽くさなきやならん。」

それに、客観的に見れば百代が男を振ったって話だろ。」

だって、相手も決闘じゃないつて言つてたし。

「京」

「つまり、礼を尽くして来た相手に礼を返さないのはだめつて事。クリス、いい子だから我慢我慢。」

「クリス」

「こら、京。子供扱いするな！」

「モロ」

「とこ、うか、皆、ワソ子の闘いを見なよ、そろそろ。」

モロの言葉で、全員が闘いを見るに徹する。

そして、始まつた。

「京・クリス・まゆつち」

「えつ？」

「？」

声に出したのは3人だが、恐らく俺と百代以外を驚いているだろ？。

そして、皆が驚いた理由は、

「京」

「は、速い。」

「クリス」

「しかも、キレが今までの比じゃない。」

「まゆっち」

「それだけじゃない。全くの無駄がありません。」

ほう。人目見ただけで、そこまでもまゆっちは分かるか。

「百代」

「今までのワニ子の動きとは全然違うな。これもお前のお陰というヤツか、隼人？」

「隼人」

「まだ序の口だ。元々の鍛錬がなきゃ短時間でここまで来ない。」

「百代」

「努力の天才ってヤツか。」

「隼人」

「そういう事。でも、まだまだ。」

「百代」

「ああ。師範代には届かない。」

速いだけじゃ駄目だからな。

「隼人」

「ま、これから、少しずつ闘い方も教えていくぞ。」

「ユキ」

「あ、終わっちゃった。ワン子強~い。アハハハハ。」

まあ、あれぐらいなら余裕でしょ。

「隼人」

「んじや、もう一人の相手をしてやりますかね。」

「大和」

「えっ！ 兄さんが出るの？」

「隼人」

「なんだ、可笑しいか？」

「大和」

「可笑しくはないけど。」

「ユキ」

「隼人が可笑しいんだよ。いつもは出ないくせに。モモ先輩に食べられちゃえ。」

ユキが肩に乗つかりながら、髪を弄くつてくる。

「隼人」

「たまにはやるわ。んじゃ、行つてくる。」

対戦相手に向かつていぐ。

〈隼人〉

「じゃあ、始めましょうか。」

〈男〉

「よろしくお願ひする。」

〈隼人〉

「では、どうだ。」

俺は、構えない。

端から見れば、無防備だが今からやる事はただ一つ。

〈男〉

「せやあああ

突つ込んでくる相手の足を払い、そこから下がつてくる顎を、

〈隼人〉

「はい。」

踵で蹴りぬく。

〈男〉  
「うがつ」

もちろん、顎を蹴りぬかれた相手は倒れる。

「隼人」

「こんな感じで、相手の力を利用してやれ。分かつたか、一子。」

「一子」  
「はい。」

一子は、言つよりやつた方が吸収早いからな。  
いや、いじに對戦者が来たよ。

にしても、見事に決まった。

相手の足を払つて、スピードせいで体勢を直せない相手の落ちてき  
た顎を蹴る。

見事に決まった。

「隼人」

「んじや、学校行くか。そろそろ、時間だる。」

このまま、順調にいけばいいな。



## 獵犬、S加入

- side 隼人 -

「隼人」

「平和だ。」

「子の修行も今の所順調。

これといった事件もなく、百代の暴走もない。

「隼人」

「平和、だ？」

平和だと思ってたんだが、なんか嫌なことが起こったみたいだ。

「百代」

「おい！ 隼人！」

「隼人」

「分かつたから。 そんな嬉しそうな顔をしてこっちに来るな。」

「百代」

「とりあえず、遊んできていいか？」

「隼人」

「駄目に決まってるだろ？ 下手したら、世界大戦勃発だぞ。」

このバトルマニアが。

「ユキ」

「隼人う。困まれつてつるつよ~。」

ユキも気づいて俺の所に来た。

「隼人」

「それは分かつたが。俺の肩に乗るな。」

「ユキ」

「それは無理う。」

なんでユキは、いつも肩に乗るんだ?

まあいいけど。

「メイド」

「モモ先輩に伊達先輩か。あんたら、授業はいいのか?」

じゃれてると、メイド服を着た女がいた。

「隼人」

「俺は、成績に困ったことはないからな。」

「百代」

「私には、隼人という切り札が」

「隼人」

「自分で勉強しろ。」

百代はいつも俺に泣きつくからな。

「メイド」

「所で、これはあのバカ軍人だろ？ なんでまた、あいつが来てるんだよ。」

「隼人」

「さあな。獵犬でも来るんじゃないかな？」

「メイド」

「また面倒なのが。あたしは、英雄様に危害を加える奴が増えると面倒なんだよ。」

この女（名前は忍足あずみ）は、川神学園に通つている九鬼財閥の御曹司・九鬼英雄のメイド兼護衛だから、厄介な奴が面倒なんだろう。

「隼人」

「じゃあ、俺は戻る。ユキも教室に戻れ。」

「ユキ」

「はい。」

- side out -

- side 大和 -

「クリス」

「という訳で、恐らく2年S組転入生は、マルさんだらう。」

「一子」

「マルさん？」

クリスの言葉にワン子が首を傾げる。

「大和」

「マルさんつて、この前の眼帯の軍人さん？」

「一子」

「ああ！ マルチーズね！」

「クリス」

「おい、犬。人の名前はしつかり覚えろ。礼儀だぞ。」

「一子」

「名前、なんだつたかしら？」

「大和」

「確か、マルギッテさんだつたかな。」

クリスの親父さんが、そう呼んでたはずだけど。

「クリス」

「ああ。マルギッテ・エーベルバッハという。自分の姉みたいな者だ。」

「岳斗」

「それにして、あの眼帯さんが転校生か。いいね。俺様のタイプだからな。」

「モロ」

「まあ、僕らには関係ない事かな。接点なさそうだし。」

岳斗とモロも興味はあるみたいだ。モロは、あんまりだけど。

「大和」

「京はビビりつい？」

さつきから、本読んでる京に話を振つてみる。

「京」

「S組に入るつて事は厄介だよね。あつちの戦力増える訳だし。大和好き。」

「大和」

「確かにない。ただでさえ、優秀な奴らの集まりだからな。お友達で。」

「キヤップ」

「そうなると、確かに厄介な奴が増える事になるな。だが、その方が燃えるだろう。よし！面白くなってきた！」

キヤップは、逆境の方が燃える性質だからな。

「モロ」

「というか、ナチュナルに告白と返事が入ったね。いつも事だけ  
ど。」

「京」

「新しい女が入ってきたので、すかさずアプローチ。」

「モロ」

「親指立てながら言わなくていいから。」

モロのシッコリは、早いね。いつも思ひけど。

「一子」

「あれ？ ゴキは？」

「岳斗」

「さつき教室出てつたぞ。どうせ、隼人先輩の所だろ。」

ゴキも相変わらずだつた。

「side out」

「side マルギッテ」

「マルギッテ」

「今日からこのクラスで学ぶことになりました。マルギッテ・ヘルバッハです。覚えなさい。」

中将からの勅命で、お嬢様の護衛に当たる事になった。

「宇佐美」

「よし。じゃあ、お前ら仲良くやるんだが。おじさんの手を煩わせ  
るんじゃないぞ。」

「マルギッテ」

「了解。」

返事をして、席に着く。

「冬馬」

「マルギッテさん。私は、葵冬馬です。よろしく。それと、

「準」

「井上隼だ。気軽にやつていいぜ。」

いかにもな優男とハゲが話しかけてきた。

「冬馬」

「良ければ、後で一緒にお茶でもいかがですか？」

「マルギッテ」

「結構です。」

「準」

「若は、手が早いから氣を付けろよ。」

ハゲが忠告してくるが、

〈マルギッテ〉

「関係ありません。私にそのような話題は不要です。」

「あ、そう。」

〈あずみ〉

「おい。どけ、ハゲ。」

ハゲが視界から消えてメイドが出てきた。

〈あずみ〉

「英雄様のお話ですよ。」

〈英雄〉

「フハハハハハ、マルギッテよ。我は、九鬼英雄。英雄になる男だ。この背を目に焼き付けるがいい。」

〈あずみ〉

「パチパチパチ。さすがは、英雄様。」

〈マルギッテ〉

「マルギッテ・エーベルバッハです。覚えなさい。」

〈あずみ〉

「あなたなんですか。英雄様に向かつてその口調は?」

英雄

「出過ぎるな、あづみ！ その様な小さき事にいちいち構うでないわ！」

あづみ

「申し訳ありません。英雄様。」グキッ

メイドの女が、肩を外した。

英雄

「あづみよ。貴様はなんといつ忠義者よ。」

あづみ

「ありがたきお言葉です。英雄様！」

なんだ、この茶番は。

「此方は」

## 隼人の繋がり

- s i d e 隼人 -

<隼人>

「はい。どちら様ですか？」

電話と共にそれはやつてきた。

<男>

「私だ。」

聞こえたのは男の声。

しかも、あまり聞きたくない声。

<男>

「来年だな。それまでに、覚悟を決めとくんだな。」

<隼人>

「いきなりで、しかも随分とほつきりモノを言いますね。」

<男>

「お前ももう子供ではないからな。それに賢いお前の事だ。もう遠まわしに言ひ合ひのりも疲れた。」

<隼人>

「そうですか。もう年なんじゃないですか？」

<男>

「隼人」

「ああ。最近、自覚する事が多いよ。後継者が不在でな。」

「隼人」

「相変わらず、皮肉が好きですね。」

「男」

「そう聞こえたか？ 事実を事実として言つたまでだが。」

「白々しい奴だ。」

「男」

「まあ、じつくりと覚悟を決める。それと霧夜と本多の御令嬢が会いたがつてたぞ。」

特に、霧夜の方は結構焦れていたからな。気をつける事だ。」

「隼人」

「忠告ありがとう。叔父さん。」

「ちつ、死ね。」

電話が切れると溜め息が出てきた。

昔からだが、あの人は嫌いだ。」

「百代」

「叔父さんか？」

隣にいた百代に聞いてきた。

そういうえば、隣にいたのを忘れていた。

「隼人」

「ああ。」

「百代」

「相変わらずのようだな。」

「隼人」

「みたいだ。それにしても、よく分かつたな。」

「百代」

「お前が、電話越しで今の顔をするのはあの人だけだらう。」

なんか見透かされてるようで腹が立つ。

「百代」

「それにしても、あと一年もないか。実力行使つて訳にはいかないのか？」

「隼人」

「無理だな。そんな事をしたら、姉さんに迷惑かけちまう。」

「百代」

「あの人ならそんな事気にしないだろう。」

「隼人」

「だらうけど。」

そんな事を言つてたらまた電話がなつた。

「隼人」

「尊をすればなんとやらつてか。」

「女」

「何が?」

電話からは聞きなれた女の声が聞こえてきた。  
電話の相手は、本多 玲。

俺とは幼い時からの知り合いだ。

「隼人」

「じつちの話だ。所でどうしたんだ?」

「玲」

「アンタが連絡寄越さないからじゃない。前は、たまにだけ連絡  
くれたのに。」

「隼人」

「忙しかつたんだ。」

「玲」

「ただの学生のアンタが、私よりも忙しい」と?

「隼人」

「いや、さすがに玲よりは、暇だらうけど。」

こいつの実家は、国内では五指に入る財閥なので、同じ年で家の手  
伝いをしているのだ。

それに、こいつの家を武家の血筋だから、身体能力はもちろん、武  
術もこなす。

「玲」

「そんな私が、夜な夜な愛する人からの電話を待つてたのに電話の一つ寄越さないなんてねえ。」

「隼人」

「おい。人聞きの悪い事を言つんじゃねえよ。」

「玲」

「あれ？ そ、うだつけ？ まあいいや。」

「隼人」

「お前も相変わらずだな。」

「玲」

「そ、うなのよ。だから、・・えつ、・・・・・もう・・・ごめん。ま  
た忙しくなつたからまたね。」

そう残して、電話が切れた。

「隼人」

「相変わらずだな。」

「百代」

「ああ、お前もな。」

「百代」

なんか、百代が不機嫌なんだけど。

「お前は、隣に女がいるのにその横で他の女と仲良くしてると  
いつつも。」

「隼人>  
・・・・それが?」

百代 < >

「私は、それが万死に値すると思つんだが、どう思つ?」

「隼人>  
「知るかつ！」

逃げるが勝ちだ。

「逃がさん！」  
百代へ

百代が全力で追いかけてくる。

まあスピードは俺の方か上だから通い一ヵれることはないと思  
うんだが。

百代 <  
>

「也沒有什麼問題，」他說，「但請你別忘了，

この顔を見たら、悪魔も裸足で逃げ出すつて。  
なまじ綺麗な顔してる分怖い。

「隼人」  
「知らねえつづうの。」

「知らねえつづうの。」

「お前が、何をやつてんだ？」

小声で呟いてのだが、

「百代」

「何が、知らないだああああああ。そのせいで、私がどれだけ。

」

もう嫌だ。

この鬼ごはんは、一時間ぐらい続いたとさ。

## 突然の来訪

- s i d e 隼人 -

「隼人」

「ん？」

突然に、本当に突然、背中に冷たいものを感じた。だが、それも一瞬で消えた。

「百代」

「どうかしたか？」

珍しく登校中に女子の下に行かなかつた百代が声をかけてくる。

「隼人」

「いや、何か感じたんだが。お前は、何か感じなかつたか？」

「百代」

「私は、何も感じなかつたぞ。」

百代が気付かないと氣のせいいか？

「ユキ」

「ボク、感じたよ～」

「隼人・百代」

「「なに！」」

百代や俺が気付くか気付かないかのものを感じただと。

「一子」

「え？ 何々？ どうかしたの？」

「一子にも一応聞いてみるか。」

「一子」

「ううん。私は、何も感じなかつたわ。」

「百代」

「一子も気付かない。ユキだけが感じれたか。なんだううな？」

「隼人」

「まあ、分からぬものを気にしても仕方ないだろ？。」

クリスや京と喋つてこぬまゆつぢや、気付いてないだろ？。

「岳斗」

「おー、校門の前に年上っぽい美女がー！」

岳斗の声に一同がそつちを見る。

「一子」

「ホントだ。」

「キャップ」

「なんだなんだ？ 画面うそつな匂いがするぞー。また、クリスの知り合いか？」

「クリス」

「いや、自分の知り合いではないぞ。」

「モロ」

「というか、明らかに日本人だしね。」

「京」

「大和、知ってる？」

「大和」

「いや、俺も知らない。」

「岳斗」

「んな事どうでもいいんだよ！ お、ねえさ～ん！」

岳斗が特攻して行つた。

「というか隼人。あれ、あの人じやないか？」

それは、さつきから思つてたよ。

「隼人」

「たぶんな。」

なんで、校門の前なんかにいるんだよ。あの人は。

「岳斗」

「隼人先輩！ どういう事だよー！」

「隼人」

「暑苦しい。」

いつの間にか戻ってきた岳斗に胸倉を掴まれた。  
蹴り飛ばしといったけど。

「隼人」

「はいはい。『指名なのね。』

久しぶりの再開といきますか。

「隼人」

「こんにちは。」

「女」

「また、見ないうちに逞しくなったわね。」

俺の顔を見て、笑顔で返してくれる。

「隼人」

「ええ。久しぶりです。」

「女」

「何年ぶりかしらね。」

「隼人」

「最後に会ったのが、中学に入る前ですからね。6年は経つてると  
思いますし、俺が家を出てからは今年で10年ぐらいじゃないですか。」

「女」

「ホント、長かつたわ。」

「隼人」

「それには、同意しますよ。」

本当にいろんな意味で長かつた。

「女」

「といひでや。」

「隼人」

「はい?」

「女」

「なんで敬語なの?」

なんでそんなに笑顔で言つのかな、この人は。

「隼人」

「いや、久しぶりに会つとで、つー。」

「女

「電話で話したりしたの?」

「隼人

「まあ。」

「女

「昔から、礼儀正しい子だつたからねえ。ヤトくんは。」

「隼人

「そんな事ないですよ。」

「ちなみに、ヤトっていつのは、昔のあだ名だ。」

「女

「そんな事あるよ。私がいくらヤトくんを出汁に小言を言われたと

思つてゐるのよ。」

そんな事はないんだけどなあ。必死に真似してただけだし。

「女

「とにかく、今更私に敬語は無し! いい?」

「隼人

「分かつたよ。薰姉さん。」

「薰

「うん。よろしい。」

伊達薫。俺の従姉妹で、姉貴分。ある意味、俺が一番世話になつた人でもある。

この人には、昔から適わないんだよね。

〈隼人〉

「じつには、何をしに？」

〈薫〉

「大学も卒業したからね。留学先から帰つてきたんだけど。そしたら、じつに行つてこつちで住めつてね。」

〈隼人〉

「な！ それを叔父さんが？」

〈薫〉

「そういう事なんだけどね。まあ、私の事は、近所のお姉さんみたいに思つてくれればいいよ。

そういう訳で、よろしくね。」

笑顔で言つてくるが、その笑顔で確信した。

これが、俗に言つ波乱の幕開けというヤツですか？



## 波乱

- s i d e 隼人 -

姉さんと再会した日の夜。

〈隼人〉

「姉さん。」

〈薫〉

「なあに?」

〈隼人〉

「近所のお姉さん」とでも思えつて言つたよね。」

〈薫〉

「うん。」

〈隼人・薫〉

「…………」

〈隼人〉

「近所どこか部屋一つ挟んだだけじゃないか!」

〈薫〉

「ね、近所でしょ。」

〈隼人〉

「近所すぎてどうすればいいか悩んでしまつよ。」

なんで、川神院に住む事になつてんだよ。

「隼人」

「爺は知つてんのか?」

「薰」

「ええ、もう一ヶ月も前に許可を頂いてるわ。」

なんでそれが俺に伝わつてないんだよ。

「薰」

「ちなみに、鉄心さんは面白そつだからあなた達には言わないつて。」

「

「隼人」

「爺、死ね!」

あんのスケベ爺が。  
さつをとくたばれ!

「一子」

「ねえねえ。お兄様。」

「隼人」

「ん?」

「一子」

「私、この人の事、お兄様の知り合いつて事知らないんだけど。  
どんな人なの?」

そういうえば、百代は会つた事があつたけど、一子はなかつたな。

〈隼人〉

「俺の実家、つまり伊達家の方の知り合いだから無理もないな。というか、百代！ 人の枕に顔を埋めるな！ 句いでも嗅いでんのか！」

〈百代〉

「いいだろ、減るもんじゃないんだから。お前の枕は、いい句いがするんだよ。」

〈隼人〉

「黙れ枕を離せ。」

俺からいい句いがする訳がないだろうが。

〈一子〉

「お兄様、今日は荒れてるわ。」

〈薰〉

「仕方ないわよ。私だつて、いきなりヤト君と一緒に生活するように言われたらこうなるわ。」

薰姉さんは、一子を膝に座らせて頭を撫でてる。

〈隼人〉

「ほのぼのしそぎだつて、そつちは。」

とこうか、それを理解してゐんだつたら俺に一報入れてくれ。

「隼人」

「もういいか。で、薫姉さんの事だつたな。」

百代は諦めて、一子に説明を始める。

「隼人」

「薫姉さんは、俺の従姉妹だよ。」

「一子」

「お兄様に従姉妹なんていたんだ。」

「隼人」

「従姉妹だけだつたら、同世代だけでも後6人はいる。」

「一子」

「へえ。意外だわ。」

「薫」

「ヤト君の場合、顔を会わせてない人もいるけどねえ。」

「隼人」

「家を出たのが8歳だからな。それに、俺と仲良くなってくれたの薫姉さんぐらいだし。」

「薫」

「皆、あなたに対抗意識全開だつたから仕方ないわ。」

「百代」

「ほう。隼人は、その頃から優秀だつたのか。」

枕の匂いを嗅いでた百代も話に参加。

< 薫 >

「まあね。天才姉弟って言っていた程だったから。」

< 隼人 >

「別に俺は、天才じゃない。」

「これは本当だ。」

< 薫 >

「ヤト君はいつもそれね。まあ、あれだけ周りから“劣化コピー”って言われればね。」

< 百代・一子 >

「 “劣化コピー”？」

< 薫 >

「あれ？」

< 隼人 >

「姉さん！ その話はいいから。」

< 薫 >

「言つてなかつたのね。ごめんね、今の無し。」

正直、あの時の事は今でも思い出したくない。

< 薫 >

「まあ、とにかく、ウチの家は、とにかく競争が激しくてね。それで、ヤト君は優秀だったから、年上に煙たがられたのよ。」

「百代」

「競争が激しい」とは言つても幼い子供だぞ？」

「薰」

「その子供が、一番頭前に相応しいって言われてたからね。」

「百代・一子」

「「頭首?」「

「薰」

「そ、一族の一番偉い人。」

「一子」

「そんな感じの家つて、御三家以外にもあるのね。」

「百代」

「東北筆頭とはいえ、そんな制度がまだ生きていたのか。」

「薰」

「ウチは、皆プライド高いからね。奥州筆頭伊達正宗の子孫つてだけで。」

「一子」

「伊達正宗の子孫!」

「薰・百代・隼人」

「え?」「ん?」「お?」

「子の一言に全員で反応。

「一子」

「伊達政宗つて、伊達政宗?」

「隼人」

「たぶんな。」

「隼人」

「教科書に載ってる?」

「隼人」

「ああ。」

「一子」

「あのどぐがんりょう?」

「隼人」

「独眼竜だ。」

独眼竜ぐらい言えないでどうするんだ。これからは、勉強も教えてやらんと。

「百代」

「そういえば、ファミリーには言つてないな。私も気にしてなかつたし。」

「隼人」

「そういえば、忘れてたな。」

「薰」

「やつ言い事は、しつかり言つときなさい。後々、面倒よ。」

はい、反省。

「隼人」

「ウチのフタミニーは、そういうところ無難着だからな。」

「百代」

「で、薰さん。話の続きだ。」

混乱してゐ一子を放置して、百代が促す。

「薰」

「とまあ、隼人は、年下の癖について嫌われてたのよ。」

「百代」

「だつたら、その座を力で奪えばいいものを。」

「薰」

「それは無理よ。」

「百代」

「どうして?」

「そう力づくで解決したら、何も問題は起きない。」

「だけど、

「薰」

「頭首になるために、前提条件を満たして居る必要があるの。それを満たしていなければ、どんなに優秀でも偉くてもなれないわ。」

「百代」

「それを、隼人は満たしていたと。」

「薰」

「そう言つ事。他には一人だけ。でも、両方女だからって却下されたわ。」

「百代」

「じゃあ、ただ一人の適合者だったのか。」

「隼人」

「そう言つ事だ。」

まあ、仕方ない事だと思えばそれまでの事なんだけどね。

「百代」

「所で、条件とはなんだ?」

「薰」

「それを言つてなかつたわね。伊達家頭首の条件、それはね。」

「百代」

「それは?」

「薰」

「眼の開眼よ。」

## 「眼の開眼？」

薰くわん

卷一百一十五

百代は沈黙。 といふか、 一子が湯気吹き出してるんだが、 まあいい  
か。

百代 < >

薰

「伊達家の特殊能力とでも言えばいいかしらね。百代ちゃんの瞬間回復みたいなモノよ。」

効果はもちろん違うけど。」

効果はもちろん違うけど。」

百代

「どんな効果なんだ？」

薰

「効果は言えないわ。でも、名前だけ教えてあげる。」

あ、名前だけで不満そうだ。

薰

「種類は一つ。名前は、竜の眼と蛇の眼。」

「百代」

「……竜の眼……蛇の眼……」

「薰」

「ま、聞いたことはないと思つわ。」

「百代」

「確かに聞いたことがない。」

「薰」

「伊達家の強みだからね。まあ、この一つのどちらかを持ってないと頭首にはなれないの。」

「百代」

「それを、隼人は持つてると。」

「薰」

「ま、そう言つひとつ。」

「面倒なんだよね、この眼。」

効果の割りに反動が大きいし。

「百代」

「所で、聞いていなかつたが、なんで薰さんはここに来たんだ？」

「薰」

「許婚だから。」

百代 < >

「へえ、そうなのか。」

三

「ええ。 そりなの。」

二四

• • • • • • • • • • • • • • • • •

卷之三

『 』

三

• • • • • • • • • • • • • • • • •

1-3

「許婚え

4

ほら、  
波乱だ。

## 波乱（後書き）

セリフが分かり難いと意見があつたので、少し形式を変えました。

- side 悠獅 -

〈悠獅〉

皆で飯食うて言つたのに、我か妹は何処に行つたんだ?」

俺は、赤く染まつた空のした変態の橋近くの川原を歩いていた。ウチでは飢えた獣（弟と妹）が待つてゐるのだが、もう片方が戻つてこないのだ。

〈悠獅〉

たぐり。今田は、どうで寝てるのかねえ」「

そう思いながら、先日の輩を思い出していた。

そう、俺の根城に居た奴だ。

回憶

∨ ? · ? · ? ∨

柳瀬悠獅さんですね？」

〈悠獅〉

[ 3 ]

目の前にいたのは、とてもなく不気味な奴。  
特に仮面を付けたり、格好が変だつたりするのではなく。

「？」

「ほう。随分と勘が働くようだ。」

そう。ただ単純な動物的な勘。  
そして、

「？」

「しかも、私のような者を求めてくると。これはこれは、御しがた  
い人だ。」

田の前にいるの異端。ただ一つとして、まともなトコが一つもない、  
その集合体。

「？」

「ふむ。かなりの見識も持ち合わせているようだ。これは、僥倖。  
あなたのような者に会いたかった。これ以上ない程に適役だ。」

「悠獅」

「あなたの名前は？」

「？」

「私の名か。さて、どうしたものか。」

そいつは、考えていたがふと思いついたように言つ。

「？」

「では、あなたが好きな名を付けるとい。」

ちなみに言つておぐが、君が名を教えるに値しないといつ訳ではな  
い。

私にとって、名など幾千ある内のただ一つの名前には過ぎない。

ならば、あなたとの出会いに喜びを表し、その相手であるあなたに名を付けていただくことのもう一興といつだけの事。」

「悠獅

「俺との出会いに喜びを、か

「？」

「その通り。獣は、カール・クラフト。花は、カリオストロ。我が同胞は、メルクリウス。

他にも多くの名を付けられたよ。故に、名というモノに愛着が持てない。なので、あなたに名を付けてほしい。それが、私だというよ。う。」

「悠獅

「まあ、それはいずれ勝手につけさせてもらひう。」

「いやいや。今日の所は、特にね。また、近い内に会って着ますよ。」

「？」

「」

「悠獅

「ううか。じゃあ、わざと帰つてくれ。こつらも色々ある事があるんでな。」

「？」

「ならば、この辺で。でも、一つだけ言ひおかましよ。」

「開演は、近いでしょ。」

そう言つた瞬間に、そこは完全で霧のようになってしまった。

「悠獅」

「開演？」

「回想終了」

とてつもなく胡散臭い奴。信用には置けないタイプだ。  
そして、なにより、敵にするも味方にするも厄介なタイプ。  
敵にすれば単純な脅威。味方にすれば内部破壊の異分子。

「悠獅」

「なんにせよ。面倒なのに眼をつけらちゃったな。」

そつ嘆いた瞬間、草の上で寝ている辰子を見つけた。

「悠獅」

「辰子。」

「子辰」

「あ、お兄ちゃん。」

満面の笑みで応えてくれる。

全く、なんであの家に居てこんなにいい子に育つんだか。

「悠獅」

「帰るぞ。つて、誰だそれ。」

隣には、銀髪の男が寝ていた。

「辰子」

「さあ？ でも、かわいいよねえ～。絶対、弟だよ～。」

「悠獅」

「なんで、そんなのが分かるんだ？」

「辰子」

「こう、外面からは、感じとれない弟オーラが出てるんだよ。」

「辰子の」れはよく分からんが、高性能らしい。

「悠獅」

「まあいいか。とりあえず、帰るぞ。竜兵と天が待ってる。」

「辰子」

「うん。えへへへ～」

返事と同時に俺の右腕に抱きついてきた。

腕を組みながら歩いていると、向かいから何人かの集団がきた。

「男1」

「兄さん！ いたぞ。」

「女」

「あ、ホント！ お兄様～。お姉さまが～。」

「男2」

「隼人先輩！ モモ先輩を止めてくれ～。」

「男3」

「いのまほじゅあ～。」

なこやら騒がしいが俺の知つたことじゃない。  
にしても、

「悠獅  
開演、か。」

その言葉だけが気がかりだった。

友人／不穏な影

- side 隼人 -

川原で昼寝中、一本の電話が来た。

〈隼人〉

「珍しいところから、電話が来たな。」

電話の相手は、俺のよく知る男だった。

〈隼人〉

「お前が俺に電話するとは珍しいな。」

〈男〉

「つるせえ。こっちに事情があるんだよ。」

クールで不機嫌そうな声が聞こえてきた。  
まあ、こいつの場合、いつも不機嫌そうな上に口もあんまり良くな  
いからな。

〈隼人〉

「で、どうしたんだ？」

お前から電話するなんてなんかあるんだろう？

〈男〉

「なきや 電話なんてしねえよ。」

電話の男は、武田信同。

俺の昔から友人だ。まあ、顔を合わせたのなんて数える程だけ。それでも、何かと気が合つた。

「信司」

「お前、最近、他の武家と連絡とつたか？」

「隼人」

「他の武家と？」

「玲とは連絡とつたけど。」

実家を出てからそういうのはあんまりしてないし。  
それでも連絡を寄越すの玲と信司と数人しかいない。

「あいつは、どうでもいいんだよ。  
お前の敵には絶対ならねえから。

「他は？」

「信司」

「他？  
そんな奴は……」

「隼人」

「あ、天花は相変わらずって聞いたぞ。」

「信司」

「あいつも、コントロールできる様な奴じやないからいいんだよ！  
他だ。織田とか雑賀とか」

「隼人」

「織田とか雑賀とかって、西の方の奴か？」

俺、あっちの奴とそんなに仲良くしてないぞ。天花は別だけビ。

織田の高慢野朗とか雑賀の女好きとか面倒だし。

ちなみ、天花とは、俺と玲と信司、共通の友人だ。  
なんか凄いふわふわしてる。性格じゃなくて行動が。  
キヤップなんかと気が合いそう。

「信司」

「ちつ。お前に聞いた俺が馬鹿だつたか。」

「隼人」

「散々な言いようだな。また、のしてやるうか?」

「信司」

「いいねえ。やってみるよ。

いつまでも俺が負けると思つてんじゃねえだろ?」

「隼人」

「そう言つて、お前はいつも負ける。」

「信司」

「るせえ! パワーじゃ負けねえ分、正面きつての殴り合いでになつたらどつちに分があるか理解してるんだろ?」

「隼人」

「だつたら、正面きつてなんてやらないね。」

「信司」

「てめえもいつもそれだ。」

さつきからかなり馬鹿にしてるけど、信司もなかなか侮れない。本人の言つようにパワーは、俺よりも上。それどころか、百代よりも上だろ？。

つまり、俺の知り合いであいつにパワーで勝てる奴はいない。本気でやりあつたら、百代と同レベル。

瞬間回復がある分、百代の方が強いだろ？けど。

というか、いつも百代は強い奴探してるけど、

俺の知り合い、というか友人は大抵百代クラスで戦える。

俺からすれば四天王なんてお飾り。

四天王と同クラス、それ以上に戦える奴なんて俺の知り合いだけで十人近くはいる。

〈隼人〉

「とりあえず、話を戻すけど。

連絡がどうかしたのか？」

〈信司〉

「まあな。お前、幸人は知ってるよな。」

〈隼人〉

「幸人？ 真田の坊ちゃんか？」

女顔でよく姉たちに女装させられてるイメージが浮かんでくる。お坊ちゃんって感じだけど、さつき言つた四天王クラスの知り合いの一人。

〈信司〉

「坊ちゃん扱いはやめてやれ。凹み易い奴だから。」

〈隼人〉

「で、その幸人がどうした?」

〈信司〉

「最近、様子が変だからよ。いろいろと調べたりしてみた訳だ。」

〈隼人〉

「そしたら、それに織田と雑賀も絡んでた、と

あの女顔が織田と雑賀と仲良くできると思わないんだけどなあ。いや、幸人がおおらかだからか。

〈信司〉

「そこまでは言わん。ただ、白か黒か言つたら、かぎりなく黒に近い灰色つてことだ。」

〈隼人〉

「灰色は当てにならないぞ。灰色なんて、そこら辺にいくらでもあるんだから。」

〈信司〉

「まあ、とにかく。その他に何人か絡んでるみたいでな。お前は、なにか知らないかとね。」

そういう訳ね。

でも、俺には何も話がきてないからなんとも言えないな。

〈隼人〉

「どうか、そういう事は、玲に聞けばいいんじゃないかな?」

後、西の事なら、天花とか。」「

「信司」

「玲には聞いた。天花は旅だと。」「

玲が知らないとなると俺が知ってる確率は格段に落ちる。天花は、まあ、いつもどおり。

「隼人」

「西絡みで、他に聞けるような奴……いや、真田が混じってる時点では西ではないか。」「

「信司」

「それに西には西で、西方十勇士とかできたらしいからな。西でまとまってる訳じゃないだろ。」「

「隼人」

「西方十勇士？ なんだそりや？」「

「信司」

「なんでも、日本の中心は西で俺たちはその代表だって奴の集まりみたいなものか。」「

石田の坊ちゃんと島のおっさんを中心など」「

「隼人」

「年下をおつせん言つてやるなよ。」「

まあ、あいつ、うりいなら、なんともなるからいいか。」「

「信司」

「とりあえず、そういう訳だからなんか分かつたら教えて。」「

じゃな。」

そういうて、電話は一方的に切られた。

「隼人」

「いきなり切るなよな。」

にしても、最近、嫌な感じがそこいらじゅうからするんだよな。

「隼人」

「これは、一波乱あるかな」

一子の修行もわざとケリつけなきゃならんかね。

## 体育祭

- side 隼人 -

今日は、学園で一番盛り上がると言つてもいい体育祭だ。  
今回の体育祭は、普通の体育祭だ。  
まあ、色々と競技が普通じやないけどな。

〈隼人〉

「にしても、暇だな」

俺は、爺から競技への参加を制限されてるせいで暇なのだ。

〈百代〉

「またしても、1位はS組、2位F組。  
さつきから2年はSとFのデットヒートだあ！」

百代は、放送を任されてる分俺よりは暇じやない。

〈隼人〉

「どうか、なんであの2組はあんなに張り切つてんだ？」

いつも張り切つてるが今日のは異常だろ。  
殺氣だつてるつていうか。

〈弓子〉

「なんでもこの後に川神戦役をするんだそつよ」

〈隼人〉

「へえ。 そつか」

ま、あいつ等は普段からあれだからしうがないか。

「子」

「にしても、暇なんじやない?」

「隼人」

「まあな。 つて、素で喋つていいのか?」

いつもの候が抜けてるだ。

「子」

「まあ、伊達君の前じゃ素で喋つたりしちゃつてるし。  
今は一人だからいいかなつて」

「隼人」

「そんなものか」

ま、本人がそれでいいならいいんだが。

「百代」

「それでは、一般の生徒はフィールドからさがつてくれ」

「子」

「あ、始まるみたい」

フィールドから生徒がいなくなつて、爺が出てきた。

「隼人」

「うよつと近づいてみるか」

ファミリーの近くまで少し行ってみることにした。

鐵心

## 「これより川神戦役を始める」

決闘が起きるのは日常茶飯事だが、川神戦役にまで発展するのは珍しい。

鐵心

一川神戦役とは本来その敵対するもの同士が行うものだが、  
体育祭という事で他のクラスから全体で3人まで助つ人を雇う事を  
許そう。

もぢろん 相手の「了承」は必要しや 他にも「ワシの「了承」が必要になる  
助つ人が了承されても、ワシが許可しない限りはだめじや」

へえう。なんかこういうので他のクラスからの参加アリつて珍しいな。

爺

「では、さあやへ始めるが。

まず一回戦の競技は、水着審査じゃ」

卷之八

۷۰۰

「デイステイードロー来た！」

さすがに水着審査、男子は大いに盛り上がりつつある。でも、

〈鐵心〉

「ただし、男子に限る」

▼野子▼

ま、学校でそんなにうまくいく訳ないわな。

男子1

「ふざけんなああああ！」

＜男子2＞

「それ、誰得だよ！」

なんか大和のクラスのカメラ持つてん奴が、言い出したの区切りに  
皆で文句言い始めた。

铁心

「ハシだつて、悲しいんじやあああああああああああああああああ

121

欲丸出しだな。

〈隼人〉

「最初からとばすなあ」

〈大和〉

「兄さん、来たんだ」

〈隼人〉

「暇だからな。で、誰を出すんだ、軍師殿」

〈大和〉

「それは、もちろん「俺様に決まつてんだろー」・・・・・だつて」

岳斗が既に脱いでいる。

〈隼人〉

「ま、いいんじやないか。他に適役もいないだろ」

〈大和〉

「そりなんだけど」

岳斗が勢い良く飛び出していく。

〈モロ〉

「向こうは、九鬼英雄みたいだよ」

〈忠勝〉

「毎度思うが、水着つつよりふんどしだる、あれ」

〈隼人〉

「確かにな」

忠勝の言葉に同意する。

ちなみに、俺は結構「コイツと喋ることも多い。

一子の面倒を見る事も多い」ともあるが、それ以上にコイツとはなぜか気が合う。

〈大和〉

「にしても、どちらも甲乙付けがたいと言つたところか

〈隼人〉

「だな」

純粹に筋肉が付いてパワフルな岳斗。

全体的に均整が取れてバランスタイプの良い英雄。

〈隼人〉

「どうすればいいかね?」

そんな事を言つてると、

〈英雄〉

「我が究極の美と言つものを見せてやるつー。」

水着に手をかけやがった。

〈モロ〉

「まさか!」

〈英雄〉

「私は脱ぐ!」

その言葉に女子全員が眼を閉じ始める。  
興味のある奴も教師に言わされて眼を閉じる。

＜英雄＞

「これが、究極の美だ！」

＜ルー＞

「脱いだー。やつてしまつたネ」

ルー先生の解説が会場に轟く。

＜岳斗＞

「おつきい。立派過ぎる。俺のバズーカが及ばないだと」

岳斗は、膝を突いて戦意を喪失する。

＜大和＞

「あれには、勝てないだろ」

会場の男子の一部以外が崩れ落ちる。

＜隼人＞

「あれ？ お前は崩れないんだな、忠勝」

＜忠勝＞

「まあ、負けはしたが惜敗つて感じですかね」

＜隼人＞

「へえ）。やるなあ」

普段はこんな話しないけど、まあそこは俺も男子つて事で。

「忠勝」

「先輩は？」

「大和」

「兄さんは全然平気なはずだ。兄さんは勝つただろ」

「隼人」

「まあな」

「忠勝」

「先輩もさすがって事か。あれに勝つとか、化物だろ」

「隼人」

「あれに惜敗のお前もだろ」

俺と忠勝は、なんだかんだで相性がいいんだろうな。

「ルー」

「勝者・九鬼英雄。2 - 5、1勝」

ルー先生の声で、女子も眼を開け、

「一子」

「なんで泣いてる人がいるの？」

「隼人」

「そつとしていてやれ」

2  
-  
F、  
—  
敗

- side 隼人 -

2-F、一敗の状況から2戦。

一戦目のゲーム対決では、2-F、大串の活躍で2-Sブレインの葵冬馬をなぜか獲得。

そして、三戦目では、一子、忠勝、ユキを5対5のスポーツ3本勝負（30-03、バッティング、フットサル）で投入するも

助つ人枠一人を3-Sを呼び込みの運動自慢で固めた井上準指揮下の2-S軍に1勝2敗敗北。

葵冬馬の奪取された上で1敗負け越し。

隼人

「こんなとこか。現状は」

モロ

「何勝手なモノローグいれてるのぞー。」

岳斗

「クソッ。こんな事だったら、一戦目でモロを捨て駒にしつくんだったぜ」

モロ

「岳斗が自分から飛び出していつたんじゃないか！」

京

「とにかく、もう負けられないね。じゃないと、大和が」

京が自分の言葉に反応してトリップした。

忠勝

「とはいって、次の競技に頭脳が関係すると厄介なことになるな」

一子

「そうね。こっちは大和がないから」

キャップ

「こっちは、単純な学力なら京や委員長でもいいんだが。軍師となるとなあ。」

クリス

「珍しいな、キャップ。随分弱気だな」

キャップ

「軍師がいなのは事実だからなあ。

でも、なんか次の対決はいける気がするんだよなあ、俺」

キャップの勘は当たるからな。

鉄心

「それでは、第四戦を始める」

爺の言葉で、会場が再び盛り上がる。

鉄心

「次の対決は、女装・男装3本勝負じゃ」

モロ

「よしー、これならウチのクラスでも戦えるよー。」

頭脳対決じゃないことに喜ぶモロ。

しかし、他の奴は皆モロを取り囲んだ。

岳斗

「ああ。この勝負、貰つたな。こいつには秘密兵器がある。秘密にしてる訳じゃないけどな。」

モロ

「えつ？ 誰？」

ヨンパチ

「何他人事みたいに言つてんるんだよ、モロ。お前しか居ないだろう」

モロ

「え？ ほ、僕？ む、無理だよ」

岳斗

「大丈夫だつて。俺様、たまにだけど、モロの肌とか見てムラムラしてたから」

モロ

「その保障は、一生聞きたく無かつたよー。」

まあ、あつむはあつちでやらせとけばいいが。

隼人 「で、後二人はどうするんだ？」

忠勝

「それなんだがな」

キャップ

「俺も一人しかあてが無いんだよ」

隼人

「だつたら、頼めばいいだろ？」

なんか嫌な予感がするんだが、

キャップ

「そうだな。片方は京が行つてゐるからあと一人だな。」といふ訳で

キャップ・一子

「お願い。助けて、先輩（お兄様）」

やつぱりか。

隼人

「お前ら、本気なんだろ？な？」

ふざけて言つてやがつたら朧月食らわせてやる。

一子

「おねがい、お兄様。負けたら大和が」

嫌なんだけどなあ。

一  
子

「大丈夫だよ。お兄様、かわいかつたよ」

なぜ、一子が過去系で言つのかは、過去に女装した事があるからだ。その時、黒いパーティードレスを着させられて、男装した百代にお姫様抱っこされた。

百代

「そ二、たそ  
お前なら大丈夫だ」

京が呼んできた百代にも言われた。

「また、ドレス着てお前と踊れってのか？」

百代

「それでもいいが、とりあえずお前も参加しろ」

「別ニハナジ」よ

百代

「じゃあ、着替えるぞ。モロはもうとっく着替えてるぞ」

毛口

更衣室の方からモロの叫び声が聞こえた。

隼人

「それが何ですか？」

着替え中

ル

言靈部のレクリエーションの盛り上がりが更に盛り上がる。

「まずは、師岡卓代ちゃん」

七八

「ううう。ばずかしいな」

モロは、普通に女子の制服を着せられ軽く化粧をさせられていた。あまりの違和感の無さに男子全体が異常な程盛り上がる。

「ウーン。これはすごい盛り上がりだネ。せっかくの2・5に比べると更にすげー熱気ダネ。

それじゃあ、その勢いのまま川神百也く〜ん

百代が出て行く。

百代

「どうだ、女子達。私とデートしたい子は、後で私の所にくるといい

百代の言葉と同時に盛り上がる女子陣。

モロの時とは打って変わらず、男子よりも盛に上かる女子

百代は、なぜ制服じゃなくそこにあるた執事服を着ていた。  
しかも、髪は後で一つに結つて、伊達メガネをかけている。  
まあ、女子が騒いでも仕方ないくらい様になつてゐるんだけど。

ル

「さあ、今度は、女子の声援が凄いぞ。」  
「わは、」  
2  
--  
Fの

隼人

「はあ。全すべ、ウチの学園は、どうじこひーじゅわノリが良このかねえ

男子

女子

「きやああああああああああああああああ」

集人

「あ～。うるせ～」

正直、この状況で声援受けてもうれしくねえよ。特に男子。

ル

「いやあ～。これは、決まっちゃうネー」

ちなみに、今の格好はモロと同じ制服じゃなく、  
またもやなぜかあつた、そして女子達にむりやり着せられたメイド  
服。

そして、軽くパーマのかかつたウイッグをつけて、軽い化粧をさせ  
られている。

隼人

「つうか、なんでメイド服があんだけよ。執事服もだけど」

鉄心

「ワシの趣味じゃ」

隼人・百代・生徒

「「「爺（学長）～～～～～～」」」

隼人

「ふざつ」「「ありがとうございます！」「」」」」えつ？」

全員の感謝（俺以外）の言葉で2・Fの勝利が決まった。

2・F、2勝2敗。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6645v/>

---

真剣で私と踊りなさい！～光陰の二人～

2011年12月31日16時46分発行